大宰府史跡発掘調査報告書　Ⅳ

平成16・17年度

2007

九州歴史資料館

大宰府史跡発掘調査報告書　Ⅳ

平成16・17年度

2007

九州歴史資料館

序

本書は，大宰府史跡第７次５ヶ年計画第３年次，及び，第４年次の計画調査として，平成16・17年度に実施した大宰府史跡の発掘調査についての報告書です。この間，これらの調査と並行して，昭和45年度に開始し，平成16年度までの観世音寺の調査成果を取りまとめた総括的な報告書『観世音寺－伽藍編－』，及び，『観世音寺－寺域編－』を刊行しました。平成13年度刊行の『大宰府政庁跡』に引き続き，大宰府史跡の基礎的な研究の成果を公表しているところです。

本書に収録した調査のうち，注目されるのは，大宰府史跡第194次調査として実施した大楠地区です。調査地は，大楠官人居住域の西側境界と考えられている第94次調査地区の西側南端部にあたり，９～10世紀代と考えられる総柱建物跡，掘立柱建物跡各１棟，12～13世紀代に埋没したと考えられる溝や整地層等を検出しました。これらは，大楠地区西境の区画や範囲の変遷を考える上で重要な遺構であります。また，大楠地区の整地層は，その西側の広丸地区の第193次調査で検出した８～９世紀頃の遺物を含む整地層とともに，政庁前面域官衙の展開を考える上で重要なものであります。

さて，平成17年10月16日，太宰府の地に九州国立博物館が開館し，これを機に，大宰府史跡の調査研究に携わる当館も，新たな一歩を踏み出そうとしているところであります。

最後に，発掘調査にあたっては，大宰府史跡調査研究指導委員会をはじめ，文化庁，太宰府市教育委員会，大野城市教育委員会，さらに地元の関係者各位から多大な御指導と御協力を頂きました。記して，深く感謝致します。

平成19年10月15日

九州歴史資料館長　森山　良一

例　言

1　本書は，平成16年度および17年度に福岡県教育委員会が国庫補助を受け，九州歴史資料館において実施した大宰府史跡発掘調査の年次報告書であり，大宰府史跡発掘調査報告書の第4集にあたる。

2　本書には，不丁地区の緊急調査として実施した大宰府史跡第192次調査，広丸地区の緊急調査として実施した第193次調査，大楠地区の緊急調査として実施した第194次調査，安養寺地区の緊急調査として実施した第195次調査，安養寺地区の立会調査として実施した第195次補足調査を掲載している。

なお，17年度に不丁地区の緊急調査として実施した大宰府史跡第136-2次調査については，現在整理中であるため，次回報告に譲る。

また，水城跡第29-2次調査，第38次調査，第39次調査については，水城跡本報告書の刊行を近年中に予定しているため，そちらにあわせて掲載することとする。

3　発掘調査については，大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。

4　本書に掲載した遺構図は，国土調査法第II座標系に基づいて作成している。

5　本書に掲載した遺構実測図は，調査課児玉真一・小田和利・杉原敏之・岡寺良・比嘉えりかと，太宰府市教育委員会城戸康利が作成した。

6　出土遺物の実測，本書掲載図の製図作業は，上記調査課員の他に，高田いく子，太宰府市教育委員会下高大輔が担当した。出土遺物の整理・復原作業は，発掘調査事務所において大田千賀子・市川千香枝・中田千枝子が行った。

7　本書に掲載した写真の内，遺構は石丸洋および各調査担当者が，遺物については福岡県教育庁文化財保護課北岡伸一が撮影した。

8　本書の執筆分担は以下のとおりである。

I			児玉
II	1	第192次調査	岡寺
	2	第193次調査	岡寺
	3	第194次調査	岡寺
III	1	第195次調査	岡寺
	2	第195次補足調査	下高
IV			岡寺

9　本書の編集は，岡寺が担当した。

本 文 目 次

頁

I 緒　言……1
1 調査計画と組織……1
(1) 調査計画……1
(2) 調査組織……2
2 調査の経過と概要……3
(1) 平成16年度……3
(2) 平成17年度……4
II 大宰府跡の調査……7
1 第192次調査（不丁地区の緊急調査）……7
(1) 調査概要……7
(2) 基本層序……7
(3) 検出遺構……8
(4) 出土遺物……8
(5) 小　結……9
2 第193次調査（広丸地区の緊急調査）……11
(1) 調査概要……11
(2) 基本層序……12
(3) 検出遺構……12
(4) 出土遺物……13
(5) 小　結……17
3 第194次調査（大楠地区の緊急調査）……18
(1) 調査概要……18
(2) 基本層序……18
(3) 検出遺構……18
(4) 出土遺物……22
(5) 小　結……28
III 観世音寺子院跡の調査……31
1 第195次調査（安楽寺地区の緊急調査）……31
(1) 調査概要……31
(2) 基本層序……32
(3) 検出遺構……32
(4) 出土遺物……34
(5) 小　結……39
2 第195次補足調査（安楽寺地区の立会調査）……41
(1) 調査概要……41

(2) 基本層序 ……41
(3) 小　結 ……42
Ⅳ 大宰府史跡採集品寄贈資料 ……45

挿 図 目 次

頁
Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地域図（1/5,000）……折込
Fig. 2 第192次調査遺構配置図・土層図（1/60）……7
Fig. 3 SD4610・4612，明灰色土出土土器・陶磁器・鉄製品実測図（1/3）……8
Fig. 4 第192次調査出土軒丸瓦拓影（1/4）……9
Fig. 5 第85・192次調査遺構配置図（1/200）……10
Fig. 6 第193次調査遺構配置図・土層図（1/120）……11
Fig. 7 土坑SK4615・4616実測図（1/40）……12
Fig. 8 SK4616・SX4617・暗色粘質土出土土器・陶磁器実測図（1/3）……13
Fig. 9 第193次調査出土丸・平瓦拓影・実測図（1/6）……15
Fig.10 第193次調査出土転用硯・漆付箱土器・石器等実測図（1/2・1/3）……16
Fig.11 第194次調査遺構配置図・土層図（1/120）……19
Fig.12 掘立柱建物SB4620・4625実測図（1/60）……20
Fig.13 土坑SK4622・4623実測図（1/40）……21
Fig.14 SD2705A・B，SK4622出土土器・陶磁器実測図（1/3）……23
Fig.15 SX4619・その他の層位出土土器・陶磁器実測図（1/3・1/4）……25
Fig.16 第194次調査出土軒丸瓦・軒平瓦拓影（1/4）……26
Fig.17 第194次調査出土鉄製品・石製品・土製品等実測図（1/3）……29
Fig.18 第94・125・194次調査主要遺構配置図（1/600）……30
Fig.19 第195次調査遺構配置図・土層図（1/120）……31
Fig.20 礎石建物SB4630実測図（1/80）……33
Fig.21 第195次調査出土土器・陶磁器実測図（1/3・1/4）……35
Fig.22 第195次調査出土古瓦（平瓦）拓影（1/4）……37
Fig.23 第195次調査出土中近世・近代瓦拓影・実測図（1/4・1/6）……38
Fig.24 第195次調査出土青銅製品・石製品実測図（1/3・1/4）……39
Fig.25 第195次補足調査地位置及び調査石垣配置図（1/1,000）……43
Fig.26 石垣１除去後 ①部分土層図（1/100）……43
Fig.27 石垣１除去後 ②部分土層図 ……44
Fig.28 石垣２法面清掃後 ③部分立面・断面図 ……44
Fig.29 寄贈採集遺物実測図（1/3・1/4）……46

表　目　次

Tab. 1　調査計画表（平成16年度）……1
Tab. 2　調査計画表（平成17年度）……1
Tab. 3　大宰府史跡調査研究指導委員会名簿（平成16・17年度）……3
Tab. 4　大宰府史跡発掘調査実施表……5
Tab. 5　大宰府史跡現状変更申請対応状況表……5
Tab. 6　第194次調査出土文字瓦一覧……27

図　版　目　次

PL. 1　(1)　第192次調査区全景（南から）　(2)　SD4610・4611土層断面（東から）
PL. 2　(1)　第193次調査区（東から）　(2)　第193次調査区（西から）
　(3)　第193次調査区東壁土層（西から）
PL. 3　(1)　SK4615（南から）　(2)　SK4616（南から）
　(3)　SX4617遺物出土状況
PL. 4　(1)　第194次調査区北半部（南から）　(2)　第194次調査区南半部（北から）
　(3)　第194次調査区南半部（西から）
PL. 5　(1)　SK4622（北東から）　(2)　SK4623（西から）
　(3)　SX4619遺物出土状況（西から）
PL. 6　(1)　第195次調査区全景（東から）　(2)　第195次調査区全景（西から）
　(3)　SB4630礎石据え付け穴（北東から）
PL. 7　(1)　SX4627土層断面（北から）　(2)　SX4628石垣遺構検出状況（南西から）
　(3)　SX4628遺物出土状況（北から）
PL. 8　第195次補足調査
　(1)　石垣１南面孕み状況（南西から）　(2)　石垣１南面除去後土層観察（南から）
　(3)　石垣１南面除去後②部分土層観察（東から）
　(4)　石垣２法面清掃後③部分正面（南から）
PL. 9　(1)　第192次調査出土遺物　(2)　第193次調査出土遺物
PL.10　第194次調査出土遺物（1）
PL.11　第194次調査出土遺物（2）
PL.12　第194次調査出土遺物（3）
PL.13　第194次調査出土遺物（4）
PL.14　第195次調査出土遺物（1）
PL.15　第195次調査出土遺物（2）
PL.16　大宰府史跡採集資料

凡　例

1　遺構番号の頭に付した記号は，以下の遺構を示す。

　ＳＡ：柵，ＳＢ：建物，ＳＤ：溝，ＳＥ：井戸，ＳＫ：土坑，ＳＸ：その他の遺構

2　掲載図面中，土器の断面を黒塗りにしたものは，須恵器であることを示す。

3　土師器・陶磁器・瓦等の報告においては，以下の文献の型式分類に準じている。

・土 師 器：九州歴史資料館1981『大宰府史跡　昭和55年度発掘調査概報』

・陶 磁 器：森田勉・横田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心にして―」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

・古 代 瓦：九州歴史資料館2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』

　高橋章2007「『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』の追加資料について」『観世音寺―遺物編２―』 九州歴史資料館

・中近世瓦：九州歴史資料館2007『観世音寺―遺物編１―』

・製塩土器：小田和利1996「製塩土器から見た律令期集落の様相」『九州歴史資料館研究論集』21　九州歴史資料館

・鋳造・鍛冶関連遺物：九州歴史資料館2007『観世音寺―遺物編２―』

Ⅰ 緒　言

1　調査計画と組織

（1）調査計画

平成16年度は，大宰府史跡第７次５ヶ年計画（以下，「第７次計画」等という。）の第３年次にあたり，これに基づき，水城跡第38次調査，及び，緊急調査として大宰府史跡第192次調査（不丁地区官衙跡）を行った。また，年度末には，懸案であった観世音寺の本報告書の第１冊目にあたる『観世音寺―伽藍編―』を刊行した。

『観世音寺―伽藍編―』

10月７・８日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会（以下，「指導委員会」という）では，初日は平成15・16年度の事業報告を行い，水城跡第38次調査地などを視察した。翌日は，第７次計画の後半の事業計画案，大野城跡の整備，災害復旧事業，水城跡環境整備基本計画案（大野城市），九州歴史資料館将来構想について報告・協議を行った。会議では，懸案である観世音寺の本報告書作成計画の変更，水城跡については西端部の自然丘陵への土塁の取り付き状況，御笠川西岸土塁欠堤部の土塁の残存状況，西門東側の木樋吐水口と外濠の構造，及び，残存状況の確認調査等の計画案，大野城跡の災害復旧事業についておおむね了承を得た。

平成17年度は，第７次計画の第４年次にあたる。大宰府史跡の発掘調査を担当する調査課では，人事異動により職員が大きく入れ替わり，課長を含めて計５名となった。水城跡第39次調査，政庁前面城３箇所，観世音寺子院跡（安養寺地区）の計５箇所の発掘調査と併行して，観世音寺の第２冊目の本報告書である『観世音寺－寺域編－』を刊行した。

『観世音寺－寺域編－』

指導委員会は，10月24・25日に開催した。初日は，平成16・17年度の事業報告を行った後，九州国立博物館及び水城跡第39次調査地を視察した。翌日は，第７次計画と平成18年度以降の調査・報告書刊行計画案，大野城跡平成16～18年度環境整備事業および災害復旧関係事業，文化財保存活用計画（太宰府市），水城跡環境整備事業（大野城市）について報告と協議を行い，貴重な指導・助言を得た。また，大宰府史跡の保存整備活用などの事業を実施するにあたり，適切な指導・助言を行い，そのために必要な調査研究を行う目的で，平成16年度末に設置した「大宰府史跡整備指導委員会」の構成委員及び設置要綱について報告し，了承を

Tab.1　調査計画表（平成16年度）

区　分	場　所	所　在　地	面積(㎡)	備　考
政庁前面官衙地区	不丁地区官衙	太宰府市観世音寺２丁目103番	6㎡	緊急調査
水　城　跡	西門北西側平坦面	大野城市下大利４丁目714	690㎡	計画調査

Tab.2　調査計画表（平成17年度）

区　分	場　所	所　在　地	面積(㎡)	備　考
水　城　跡	欠堤部西土塁・外濠	大野城市下大利３丁目11番地他	200㎡	現状変更
政庁前面官衙地区	広丸地区官衙跡	太宰府市観世音寺２丁目207番	67㎡	緊急調査
政庁前面官衙地区	大橋地区官衙跡	太宰府市観世音寺２丁目166番	130㎡	緊急調査
観世音寺子院跡	安養寺地区	太宰府市観世音寺４丁目785番	235㎡	現状変更
政庁前面官衙地区	不丁地区官衙跡	太宰府市観世音寺２丁目１番12号	210㎡	緊急調査

得た。平成17年度の発掘調査計画は，Tab.2のとおりである。

（2）調査組織

調査の主体は九州歴史資料館であり，発掘調査及び報告書作成は調査課が担当した。その組織は以下のとおりである。

		平成16年度	平成17年度	平成19年度
総 括	館 長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
	副館長	橋口 達也	濱田 信也	木下 修
	参 事	石山 勲	副島 邦弘	児玉 真一
		石丸 洋	児玉 真一	馬田 弘稔
		副島 邦弘	馬田 弘稔	中間 研志
		高橋 章	中間 研志	
		児玉 真一		
庶務・会計	課 長	榎藤 繁利	浅野 健二	浅野 健二
（総務課）	副 長	松井 安彦	松井 安彦	梅野 研次
	事務主査			野中 顕
	主任主事	永田 陽子	白谷 有三	
	技 師	井上美智子	井上美智子	
	技 師	松本 優	松本 優	
	技能員			松本 優
調 査				
（学芸第一課）	課 長	児玉 真一（兼）	中間 研志（兼）	中間 研志（兼）
	参事補佐		石山 勲	
	事務主査			釜瀬進一郎
	主任技師	井形 進	井形 進	井形 進
	主任技師	酒井 芳司	酒井 芳司	酒井 芳司
（学芸第二課）	課 長	馬田 弘稔	馬田 弘稔（兼）	馬田 弘稔（兼）
	参事補佐		橋口 達也	
	主任技師	加藤 和歳	加藤 和歳	加藤 和歳
	主任技師			大庭 孝夫
（調査課）	課 長	高橋 章（兼）	児玉 真一（兼）	児玉 真一（兼）
	参事補佐		石丸 洋	
	参事補佐		小田 和利	
	技術主査	小田 和利		杉原 敏之
	技術主査	吉村 靖徳		
	主任技師		杉原 敏之	岡寺 良
	主任技師		岡寺 良	坂本 真一

なお，大宰府史跡の調査研究，及び，整備活用を進めるにあたっては，「大宰府史跡調査研

究指導委員会」に諮り，適切な指導，助言を受けて取り組んでいる。大宰府史跡は，大宰府官衙施設，大野城・水城等の防衛施設，観世音寺およびその子院・国分寺等の寺院関係施設等を包括する。その性格や内容，規模は広く深いものであり，調査研究を適切に推進するためには，広い視野から総合的に対処する必要があるため，指導委員会は歴史学・考古学・建築史学・造園学・都市工学の専門家により構成し，その指導のもとに策定した5ヶ年計画に基づき調査研究を進めている。大宰府史跡調査研究指導委員はTab.3のとおりである。

2　調査の経過と概要

(1) 平成16年度

Tab.3　大宰府史跡調査研究指導委員会名簿（平成16・17年度）

役　職	氏　名	職　業	専門分野
委員長	笹山　晴生	東京大学名誉教授	歴史学
副委員長	小田　富士雄	福岡大学名誉教授	考古学
委　員	八木　充	山口大学名誉教授	歴史学
	川添　昭二	九州大学名誉教授	歴史学
	狩野　久	元岡山大学教授	歴史学
	佐藤　信	東京大学大学院教授	歴史学
	坂上　康俊	九州大学大学院教授	歴史学
	西谷　正	九州大学名誉教授	考古学
	町田　章　(16年度) 田辺　征夫（17年度）	(独法) 奈良文化財研究所長	考古学 考古学
	山中　章	三重大学教授	考古学
	鈴木　嘉吉	元奈良国立文化財研究所長	建築史学
	澤村　仁	九州芸術工科大学名誉教授	建築史学
	中村　一	京都大学名誉教授	造園学
	杉本　正美	神戸芸術工科大学教授	造園学
	渡辺　定夫	東京大学名誉教授	都市工学

平成16年度の計画調査は，水城跡西門地区の北西部平坦面（大野城市側）に2ヶ所の調査区を設定し，博多湾側における外濠の有無，すぐ西側にせまる自然丘陵への土塁の取り付き状態の解明に主眼をおいた。また，不丁地区官衙跡の南北に走る溝SD2340の西側隣接地を対象に遺構の状況を確認することを目的に調査を実施した。

ただし，平成15年度後半から継続して実施していた大宰府史跡第126次補足調査（観世音寺講堂地区の調査）を引き続き行っており，その調査に5月21日までを要した。水城跡第38次調査は6月7日に着手した。調査対象地の西門地区北西部平坦面の東側平坦地（A区）と西側の自然丘陵への土塁取り付き部（B区）の計2ヶ所に調査区を設定した。A区は，3期にわたる西門の変遷や官道の東側で外濠を確認した第26次調査地（西門跡とその周辺）にほぼ西接する部分にあたる。西門の西側，すなわち，西門を通る官道西側の土塁前面（博多湾側）に外濠が存在するか否かを確認するために調査を行ったが，外濠の存在を示す遺構や堆積土層は確認できなかった。すなわち，外濠の西限は，西門を通る官道の東側までである。検出した遺構は，一部に奈良時代の土坑があるが，主に平安時代の掘立柱建物，土坑，溝等である。B区は西門の西方約100m付近で，土塁が自然丘陵にほぼ直交して取り付く部分に2本のトレンチを設定し調査を実施した。土塁が取り付く自然丘陵の斜面は当初自然丘陵の削り出しと予想していたが，旧地形を段状に成形し，版築状に積土していることが判明した。この版築の基底部において，盛土地形に伴うと思われる径9cmほど

外濠の西限

自然丘陵への土塁の取り付き方

の２本の木杭を検出した。この２本の木杭は，トレンチ外に延びて土塁に並行する１条の杭列をなすものと思われる。これらの調査成果は，土塁前面の外濠の範囲を確定するとともに，自然丘陵への土塁の取り付け方は極めて入念な土木作業のもとに行われたことが判明し，東門付近においても同様の状態であろうことが想定される。調査は１月20日に終了した。

政庁前面官衙域（不丁地区）第192次調査は12月15日に着手し，調査面積が6㎡と狭かったため同月17日に終了した。住宅建設に伴う確認調査で，対象地は不丁地区の広場と官衙域を区切るSD2340の西側隣接地である。溝３条とピットを検出した。

（2）平成17年度

平成17年度の調査計画は，水城跡２件（第39・40次調査），個人住宅建設に伴う確認調査である政庁前面官衙域３件（第136－2・193・194次調査）と安養院推定地１件（第195次調査）の計６件であった。しかし，政庁前面官衙域不丁地区（第136－2次調査）の調査に時間を要したため，水城跡第39次調査は12月から中断し，第40次調査は着手できなかった。

水城跡第39次調査は８月の盆明けに着手した。水城の構造解明の一環として，御笠川西岸の土塁欠堤部における土塁の残存状況，及び，外濠（博多湾側）の状況の確認を目的に実施した。調査の結果，欠堤部の御笠川寄りの平坦部で築造当初の土塁の基底部付近の積土と，その南側と北側に土塁を修復したと思われる整地層を確認した。また，外濠は土塁前面に整地した平坦面が存在し，土塁基底部から36m付近で深く落ち込み，50m付近で立ち上がる，ほぼ14m幅の“溝状遺構”を検出した。10月24・25日に開催した指導委員会においては，土塁の修復の年代と８世紀後半の「修理水城事知官」との時期的な整合性の指摘や，外濠の構造や溝状遺構の形状確認のために調査区を拡張して広く発掘するよう指導を受けた。しかし，不丁地区の第136－2次調査等に着手する必要があったため，第39次調査は中断せざるを得ず，指導委員会で助言された点については，平成18年度の課題として持ち越すこととなった。

土塁の修復

溝状遺構

第193次調査（広丸地区）は７月25日に着手した。調査地の北西側には第96次調査において検出した官人居宅の可能性が推定される８世紀代の大型建物２棟や南北に併行する溝が，第175次調査において検出した四面庇建物１棟と東西に走る溝が存在する。調査の結果，建物などの遺構は確認できなかったが，政庁Ⅱ期頃に比定される整地層を確認し，８月９日に終了した。11月９日に着手した第194次調査地（大楠地区）は，大楠官人居住域の西限と推定される南北溝SD2705・2680を検出した第94次調査地区の南西にあたる。調査の結果，SD2705から二股に分岐した東西溝と北東から南西に走る溝各１条等とともに12～13世紀代の整地層を検出した。12月27日に全ての作業を終了した。第195次調査（安養寺地区）は，年が明けて１月17日に開始し，同31日に終了した。調査地は観世音寺49子院の一つである安養院跡推定地南端部の南側にあたる。事前に太宰府市教育委員会が調査地北の石垣の調査を補足調査として実施した。本調査では，礎石建物等の近世の遺構の他に，北東部に平安時代後期の整地層とピットを検出した。これらの遺構は安養院跡関係の遺構である可能性が高い。

政庁Ⅱ期の整地層

平安時代後期の遺構

また，この他に２件の工事に対する立会調査を行った。１件目は月山丘陵南にある大宰府展示館トイレ改修に伴う立会調査であり，２件目は水城跡第29次調査地の北隣にて行われた河川改修に伴う水城跡第29－2次調査である。共に遺構は確認できなかった。

Tab.4　大宰府史跡発掘調査実施表

平成16年度

調査次数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
大宰府史跡第192次調査	6AYM-B-Q	6	041215～041217	不了地区官衙跡
水城跡第38次調査	6AMK-W・Y	690	040607～050120	水城跡西門北西隅平柱址

平成17年度

調査次数	調査地区	面積㎡	調査期間	調査内容
水城跡第39次調査	6AMK-M	184	050817～060331	矢坂原西土塁・外濠
大宰府史跡第193次調査	6AYM-D	67	050725～050809	広丸地区官衙跡
大宰府史跡第194次調査	6AYM-C-U	105	051109～051227	大野地区官衙跡
大宰府史跡第195次調査	9GAY-C	135	060117～060131	観世音寺子院跡（区画寺地区）
大宰府史跡第196・2次調査	6AYM-A-T	210	051214～060313	不了地区官衙跡

Tab.5　大宰府史跡現状変更申請対応状況表

平成15年度

申請日	申請者	理由	申請地	面積㎡	指定区分	文化庁等指示	対応内容	許可日
12月22日	福岡県福岡農林事務所長	緊急地出	宇美町大字四王寺字ムクカ 192		特別史跡大宰城跡	県教委工事許可	宇美町教委立会	1月20日
2月 5日	福岡県教育委員会教育長	災害復旧	宇美町大字四王寺字大石城311-1（百間石垣）	2000	特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	県教委立会	3月 8日
2月 9日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	太宰府市大字佐野字小石谷407-1	120	特別史跡大宰府跡	文化庁許可	太宰府市教委発掘調査	3月26日
2月16日	太宰府市長	道路復旧	太宰府市大字観世音寺字法怒捻番号地10筆	1674	史跡観世音寺境内および院跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	3月26日
2月23日	太宰府市長	道路復旧	太宰府市大字坂本1078	167	史跡観世音寺境内および子院跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	3月26日
3月 1日	太宰府市長	災害復旧	太宰府市大字観音寺1387-1、872-62		史跡観世音寺境内および子院跡 特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	5月21日

平成16年度

申請日	申請者	理由	申請地	面積㎡	指定区分	文化庁等指示	対応内容	許可日
4月 1日	九州電力株式会社長	災害復旧	太宰府市大字岡9960-38ほか	約164	特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	5月21日
4月16日	個人	住宅改築	太宰府市観世音寺7丁目896-108	266.53	史跡観世音寺境内および院跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	6月18日
4月19日	宗教法人広心寺代表役員	本堂増築	太宰府市観世音寺4丁目559番2	591.49	特別史跡大宰府跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	6月18日
4月28日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	太宰府市大字水城字山ノ内295-85ほか 太宰城市大字五郎字乙倉1-1 宇美町大字四王寺字アスカエリ18-1ほか		特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可 文化庁工事許可 文化庁許可	太宰府市工事立会 太宰城市工事立会 宇美町教委発掘調査	5月28日
5月10日	九州歴史資料館長	発掘調査	大野城市下大利4丁目714-1・5～9、721-1・3、719-1	1000	特別史跡水城跡	文化庁許可	九歴発掘調査	6月18日
5月10日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	宇美町大字四王寺字鐘坂191-1、大字四王寺八ッ鼻219-1、大字虎坂字内の谷出谷切1100-1		特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	宇美町教委立会	6月18日
5月24日	個人	住宅改築	太宰府市観世音寺6丁目715番98、67丁目827番41	332.42	史跡観世音寺境内および院跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	9月17日
5月24日	宇美町長	災害復旧	宇美町大字四王寺字大石城、鐘坂字鳥居門		特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	宇美町教委立会	7月23日
5月24日	宇美町長	災害復旧	宇美町大字四王寺字村上3-30ほか、字大谷3-22ほか、字鐘谷3-11、字大石組3-10		特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	宇美町教委立会	7月23日
6月 9日	太宰府市長	災害復旧	太宰府市大字国分字黒山976-1、978、興分57丁目979-11	324	特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	県教委立会 太宰府市教委立会	7月 2日
6月22日	太宰府市教育委員会教育長	災害復旧	太宰府市観世音寺4丁目491ほか、796-8、715-28ほか、大字観世音寺715-27		特別史跡大宰府跡 史跡観世音寺境内および子院跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	7月23日
7月 2日	福岡県那珂土木事務所長	災害復旧	太宰府市大字大字府三条一丁目1482-2ほか、大字大字府字原1488-1ほか、大字大字原1491-29ほか、大字大字府字西堀1473-1ほか		特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	9月 3日
8月13日	個人	住宅改築	太宰府市観世音寺4丁目770ほか	774.95	史跡大宰府学校院跡	文化庁許可	県教委発掘調査（施行前） 太宰府市教委（施行時）	11月19日
9月13日	個人	建物解体	太宰府市観世音寺6丁目827番41、715番97		史跡観世音寺境内および院跡	文化庁工事許可	県教委検査	10月15日
10月20日	太宰府市長	災害復旧	太宰府市大字観世音寺1573		史跡観世音寺境内および院跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	12月10日
11月29日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	宇美町大字四王寺字鉢底3ほか、字鐘坂191-1ほか		特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	宇美町教委立会	1月21日
12月10日	太宰府市教育委員会教育長	災害復旧	太宰府市大字大字府1491-14ほか		特別史跡大宰城跡	文化庁許可	太宰府市教委発掘調査	1月21日
12月15日	福岡県教育委員会教育長	災害復旧	太宰府市大字大字府1491-1ほか、字岩谷1786ほか、大字大字府4756-1ほか	約200	特別史跡大宰城跡	文化庁許可	県教委発掘調査	1月21日
2月10日	福岡県教育委員会教育長	災害復旧	宇美町大字四王寺字大石城311-1		特別史跡大宰城跡			
3月24日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	大野城市大字九田1-6、-7		特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	大野城市教委立会	5月13日
3月30日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	宇美町大字四王寺字河内1099-16、-17、大字四王寺字大石城311-1		特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	宇美町教委立会	5月20日
3月30日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	太宰府市大字岡字宇辺872-1、大字太宰府字原1491-1、大字四堀（大原）569-1ほか		特別史跡大宰城跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	6月17日

平成17年度

申請日	申請者	種由	申請地	面積㎡	指定区分	文化庁等指示	対応内容	許可日
5月10日	個人	住宅建替	太宰府市観世音寺4丁目785	742.3	史跡観世音寺境内および子院跡	文化庁許可	九歴埋蔵調査	7月15日
6月 2日	九州歴史資料館長	発掘調査	大野城市下大利3丁目1番地ほか	300	特別史跡水城跡	文化庁許可	九歴発掘調査	7月29日
6月 8日	九州歴史資料館長	発掘調査	大野城市下大利4丁目2-2番地ほか	400	特別史跡水城跡	文化庁許可	九歴発掘調査	7月29日
6月16日	福岡県教育委員会教育長	発掘調査	太宰府市大字坂本字口上谷351-33ほか	1680	特別史跡大野城跡	文化庁許可	県教委発掘調査	7月 1日
7月13日	福岡県教育委員会教育長	発掘調査	宇美町大字四王寺字鷹取191-1	50	特別史跡大野城跡	文化庁許可	県教委発掘調査	7月29日
8月 2日	太宰府市教育委員会教育長	発掘調査	太宰府市観世音寺4丁目604番地	30	特別史跡大宰府跡	文化庁許可	太宰府市教委発掘調査	10月11日
8月 2日	個人	石垣修復	太宰府市観世音寺4丁目785番地、786番地2	27.75	史跡観世音寺境内および子院跡	文化庁工事許可	県教委立会	9月 2日
8月22日	個人	住宅建築	太宰府市観世音寺6丁目896番1号	242.19	史跡観世音寺境内および子院跡	文化庁工事許可	県教委立会	10月11日
8月30日	福岡県教育委員会教育長	発掘調査	宇美町大字炭焼字鳥砂門1101番地-1	100	特別史跡大野城跡	文化庁許可	県教委発掘調査	9月30日
9月 8日	福岡県教育委員会教育長	災害復旧	太宰府市大字坂本字口上谷351-2ほか 宇美町大字四王寺字鷹取191-1ほか	38811 111711	特別史跡大野城跡	文化庁工事許可	県教委立会	9月30日
10月25日	福岡県福岡農林事務所長	災害復旧	太宰府市大字坂本字口上谷351-20ほか、大字太宰府字大原569-2ほか、字原1491-1		特別史跡大野城跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	12月19日
11月15日	福岡県教育委員会教育長	保存整理	宇美町大字四王寺字大石垣311-1		特別史跡大野城跡			
11月16日	太宰府市教育委員会教育長	発掘調査	太宰府市大字坂本字口上谷351-47ほか	130	特別史跡大野城跡	文化庁許可	太宰府市教委発掘調査	12月19日
11月21日	太宰府市教育委員会教育長	災害復旧	太宰府市大字太宰府字原1491-14内	約100	特別史跡大野城跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	12月19日
11月24日	太宰府市教育委員会教育長	整備工事	太宰府市国分2丁目195番地ほか	2270	特別史跡水城跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	1月20日
11月24日	福岡県郡河土木事務所長	砂防工事	太宰府市大字太宰府字原1491-7ほか	5838	特別史跡大野城跡	文化庁許可	県教委発掘調査	6月16日
12月 6日	大野城市教育委員会教育長	ボーリング調査	大野城市下大利3丁目24-7ほか 太宰府市石穴171ほか		特別史跡水城跡	文化庁工事許可	大野城市教委立会	1月20日
12月19日	太宰府市教育委員会教育長	公衆便所増築	太宰府市観世音寺4丁目544-1、544-3	23.1	特別史跡大宰府跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	1月30日
1月17日	福岡県教育委員会教育長	災害復旧	宇美町大字四王寺字鷹取1ほか		特別史跡大野城跡			
1月24日	福岡県福岡農林事務所長	舗装工事	宇美町大字四王寺字鷹取1、字鷹取192		特別史跡大野城跡	県整備工事許可	宇美町教委立会	2月 6日
2月10日	大野城市教育委員会教育長	ボーリング調査	大野城市下大利3丁目24-7ほか 太宰府市石穴171ほか	約5	特別史跡水城跡	文化庁許可	大野城市教委調査	3月 2日
3月 3日	宗教法人大願寺代表役員	墓地建設	太宰府市大字太宰府字岩谷1818、字横岳1821、恵蓮坊17丁目1817-4ほか	2323	特別史跡大野城跡	文化庁工事許可	太宰府市教委立会	4月21日

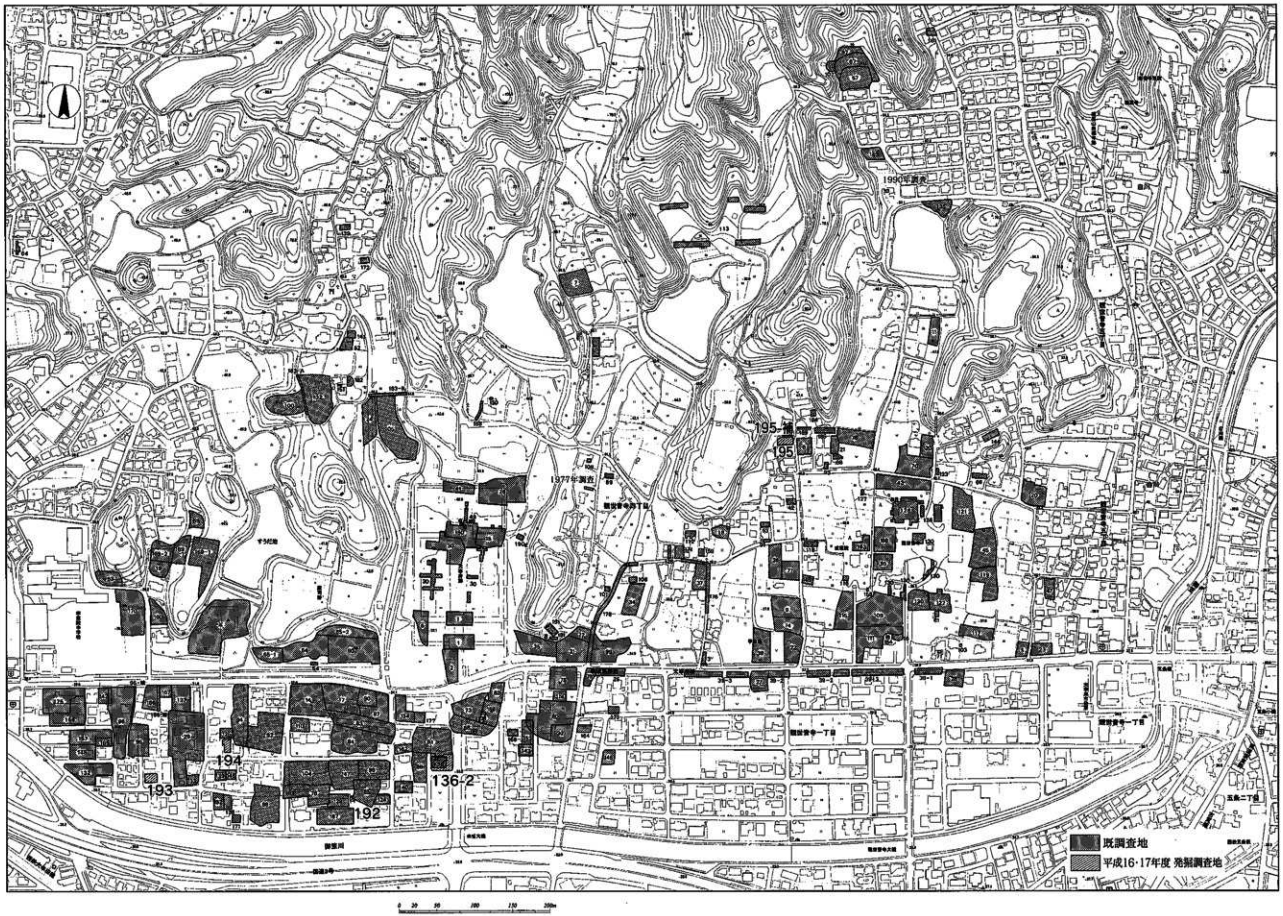


Fig. 1　大宰府史跡発掘調査地域図（1/5,000）

II 大宰府跡の調査

Ⅱ　大宰府跡の調査 ……7
1　第192次調査（不丁地区の緊急調査）……7
(1)　調査概要 ……7
(2)　基本層序 ……7
(3)　検出遺構 ……8
(4)　出土遺物 ……8
(5)　小　　結 ……9
2　第193次調査（広丸地区の緊急調査）……11
(1)　調査概要 ……11
(2)　基本層序 ……12
(3)　検出遺構 ……12
(4)　出土遺物 ……13
(5)　小　　結 ……17
3　第194次調査（大楠地区の緊急調査）……18
(1)　調査概要 ……18
(2)　基本層序 ……18
(3)　検出遺構 ……18
(4)　出土遺物 ……22
(5)　小　　結 ……28

1　第192次調査（不丁地区の緊急調査）

（1）調査概要

経　過　大宰府政庁跡の南側を東西に走る県道筑紫野太宰府線と御笠川に挟まれた一帯は，1980年代に太宰府市が都市区画整理事業を実施し，現在宅地化されている。また，この一帯は都市区画整理事業の際の九州歴史資料館（以下，「九歴」）の発掘調査により，日吉・不丁・大楠・広丸の官衙域が広がっていることが判明してきている。現在，九歴ではこの一帯について，宅地の新築もしくは建て替えに伴い，太宰府市教育委員会との協議の下，地下遺構の確認調査を進めてきている。

今回の調査地は不丁地区である宅地建設に伴い調査を行った。平成16年12月15日に調査を開始し，掘削，測量，写真撮影を行い，12月17日には終了した。調査面積は６㎡である。

位　置　不丁地区官衙跡の南部にあたり，地番は観世音寺２丁目103番である。第85次調査区の南西隅部に接する箇所にあたり，現在周辺は住宅が密集している状況である。

（2）基本層序

本調査区の基本層序（Fig.２土層図）は，上層から区画整理時の盛土（花崗岩バイラン土）が約115cm堆積し，その下層に旧表土の黒色土（約10cm），旧耕作土の黄褐色土（約10～15cm）が堆積する。さらにその下層に灰褐色土，黄褐色粘質土，明灰色土と続き，地表下約150cmで遺構面（地山・黄灰色粘質土）に達する。遺構面直上の明灰色土層は，９世紀以前の遺物が含まれており，古代の整地もしくは包含層であると考えられる。

９世紀代の遺構・遺物

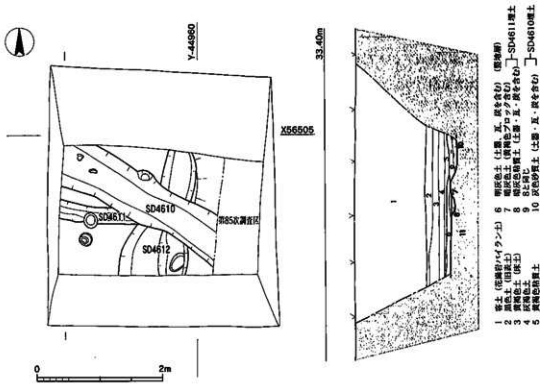


Fig.２　第192次調査遺構配置図・土層図（1/60）

（3）検出遺構

今回の調査では溝３条のほか，いくつかピットが確認されたにすぎない。

溝

ＳＤ4610（Fig.２，PL.１）

調査区を西北西から東南東へ直線状に走る幅約0.5～0.6mの溝で，溝内には暗灰色粘質土と灰色粘質土が堆積し，土器・瓦が出土する。深さ約0.15m。以下に述べる２本の溝を切っているため，それらよりも新しい。東側は第85次調査の際に検出された土坑状の遺構に接続している。

ＳＤ4611（Fig.２，PL.１）

調査区のほぼ中央を東西に走る幅約0.2～0.3mの溝で，溝内には暗灰色粘質土が堆積する。深さ約0.05m。東側はＳＤ4610に切られ，長さ約１ｍ分を検出した。遺構内からは土器片や瓦片が出土しているが，小片のため割愛した。

ＳＤ4612（Fig.２，PL.１）

調査区をほぼ南北に走る溝で，ＳＤ4610に切られる。ＳＤ4610の北側では幅約0.4m，深さ約0.05mである一方，その南側では幅約1.0～1.1m，深さ約0.1mと大きくなる。遺構内からは土器・瓦が出土している。

（4）出土遺物

ＳＤ4610出土土器（Fig.３，PL.９）

土師器

坏（1）　復元口径12.6cm，底径7.6cm，器高3.5cmで，胎土には褐色粒を含み，赤褐色を呈する。底部は回転ヘラケズリが施される。

椀（2）　体部下半から高台部にかけての破片。高台径8.4cmで，胎土には褐色粒を含み，黄褐色を呈する。

ＳＤ4612出土土器（Fig.３，PL.９）

須恵器

蓋（3）　口縁部をわずかに折り曲げる形態のもので，ツマミを欠損する。内面には墨痕は見られないものの，非常に平滑であり，転用硯として再利用された可能性が高い。復元口径は13.6cm。

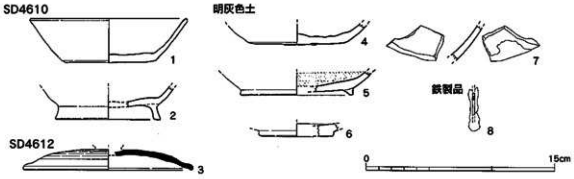


Fig.３　SD4610・4612，明灰色土出土土器・陶磁器・鉄製品実測図（1/3）

明灰色土出土土器・陶磁器（Fig.3，PL.9）

土師器

坏（4）　体部下半から底部にかけての破片で，復元底径8.0cm。底部はヘラ切りで胎土は黄褐色を呈する。

黒色土器

椀（5）　内面のみ燻しによる黒色のA類。非常に低い高台がつく。復元高台径9.0cm。底部はヘラ切りと見られ，胎土は赤褐色を呈する。

緑釉陶器

皿（6）　底部の一部が残存する小片。復元底径5.8cmで，明褐色の土師質の胎土に淡緑色の釉が薄く全面にかかる。

青　磁

碗（7）　体部の破片で，褐灰色の胎に，貫入のある暗緑色の釉がかかる越州窯系のもの。

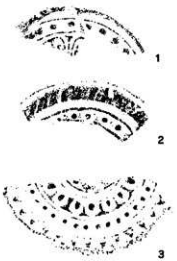


Fig.4　第192次調査出土軒丸瓦拓影（1/4）

鉄製品（Fig.3，PL.9）

針状製品（8）　断面が約2mm四方の方形を呈し，長さ約2.5cm残存する。先端部が欠損するため確定的ではないが，針のようなものと考えられる。重さ1.5g。SD4610出土。

また，これらの遺物の他に，鞴羽口の破片2点（4.2g）なども出土しているが，非常に小片であるため割愛した。

瓦　類（Fig.4，PL.9）

瓦類は以下に報告する軒丸瓦の他，縄目及び格子目の叩打痕を残す平瓦等が数点出土している。

軒丸瓦の出土

軒丸瓦（1～3）　全て明灰色土から出土したものである。1・2は型式番号223と考えられるもので，外区の界線及び珠文が見られ，1には内区の蓮弁部分が一部見られる。小片のため，型式の確定は確実ではない。3は290Bで，瓦当下半部のみが残存する。内区は中房の蓮子が僅かに残り，その周りに短い蓮弁が3～4弁残存する。外区には珠文と凸鋸歯文が施されている。非常に厚ぼったい印象を受ける。

（5）小　結

今回の調査地については，隣接地にあたる第85次調査西南隅部との関係を見ると，性格不明の土坑状遺構が密集する場所にあたることや，調査面積が6㎡と非常に狭小であったことから考えても（Fig.5），今回検出した溝群なども，現段階においては性格不明といわざるを得ない。少なくとも，これらの溝が条坊を区画するようなものにはなり得ないことだけは確実である。とはいえ，当地区が大宰府を解明する上で必要不可欠な重要地区であることには変わりはない。

今後，さらなる周辺の調査成果等とも含めて，不丁地区の正式報告書刊行の際に，再度検討を行いたいと思う。

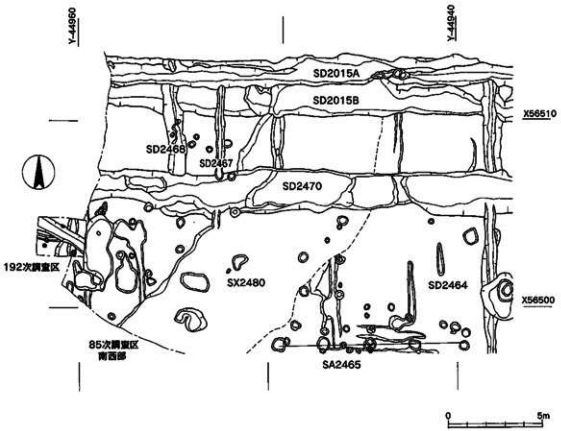


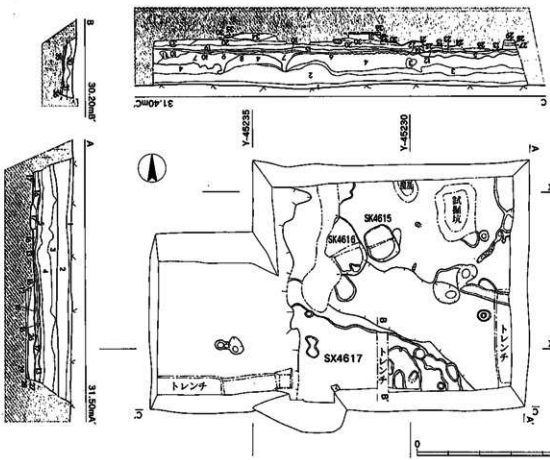
Fig.5　第85・192次調査遺構配置図（1/200）

2　第193次調査（広丸地区の緊急調査）

（1）調査概要

経　過　政庁跡の南側の一帯を九歴が行う経緯については第１節において述べたとおりである。当調査区の広丸地区においても状況は同じであり，住宅建設の進捗状況に応じて調査を進めているところである。

今回の調査は広丸地区の宅地の新設に伴い実施した。太宰府市教育委員会及び地権者との協議により，計画調査の水城跡第39次調査に入る前に行うことを決定し，平成17年７月25日に調査を開始し，重機による掘削を行った。当初非常に湧水のあることと，遺構が希薄である地点であったことから，遺構は存在しないと考えられたが，トレンチを掘り進める内に，古代の遺物を多く含む整地層を確認したため，全面的に拡張して調査を進めた。８月４日に全景撮影



1　灰色礫混土（パラス）
2　淡黄褐色土（マサ土）
3　暗褐色土（近年の旧表土）
4　2に同じ
5　黄灰色土（床土）
6　黒色土（耕作土）
7　淡灰色シルト（水田耕作土）
8　淡茶灰色土
9　淡茶灰色土（灰色シルトブロック混）
10　暗灰色土（耕作土）
11　淡黄灰色粘質土
12　淡黄灰色土
13　黒灰色土（遺物包含）
14　黒灰色砂質土
15　淡黄灰色砂質土（旧床土）
16　青灰色粘質土
17　青灰色細砂（粘質土混）
18　淡黄褐色砂
19　黒灰色砂質土
20　淡茶灰色土
21　暗灰色砂
22　暗茶灰色粘質土
23　淡黄灰色土（やや暗）
24　灰色砂質土
25　淡黄灰色土（やや明）
26　灰白色粗砂
27　青灰色粘質土
28　黒褐色粘質土
29　灰白色粗砂
30　暗灰色砂質土
31　暗灰色粘砂（炭化物混）
32　淡黄灰色粘質土
33　暗灰色砂質土
34　淡黄灰色粘質土に灰色砂質土が混じる
35　黄褐土粘質土（地山）
36　暗灰色粘土（地山）
SX4617 黒地層

Fig.6　第193次調査遺構配置図・土層図（1/120）

を行い，翌5日に重機による一部反転，9日に重機により埋め戻しを行って終了した。調査面積は67㎡である。

位　置　広丸地区官人居住域の南部にあたり，御笠川北岸の標高約30mの沖積地に立地している。北側には，東西棟SB2835が確認された第96次調査地や，広丸地区の西端の建物のとなるSB4340が確認された第175次調査地が位置している。地番は観世音寺2丁目207番であり，現在周辺は住宅が密集している状況である。

（2）基本層序

本調査区の基本層序（Fig.6土層図）は，上層からバラス及び区画整理事業時の盛土（花崗岩バイラン土）が約100～120cm堆積し，その下層に旧表土の暗褐色土（約10～30cm），旧耕作土（床土）の黄灰色土（約10～20cm）が堆積する。さらにその下層には，暗灰～青灰色粘質土及び粗砂を基調とする整地層が約50cm堆積し，地表下約150cmで遺構面（地山・暗灰色粘土）に達する。遺構面直上の整地層は，9世紀以前の遺物が含まれており，古代の整地によるものであると考えられる。

古代の整地層

（3）検出遺構

今回の調査では，土坑2基と，落ちを人為的に埋める整地が1箇所確認された。

土　坑

ＳＫ4615（Fig.7，PL.3）

調査区のほぼ中央北よりに検出した南北約1.1m，東西0.95mの隅丸方形を呈するもので，深さ約0.4mである。埋土は後述するＳＸ4617の埋土と同様な暗灰色粘質土を基調とする単層である。

ＳＫ4616（Fig.7，PL.3）

ＳＫ4615の西側に並ぶように検出された。南北約1.15m，東西約0.95mで，西側は削平に

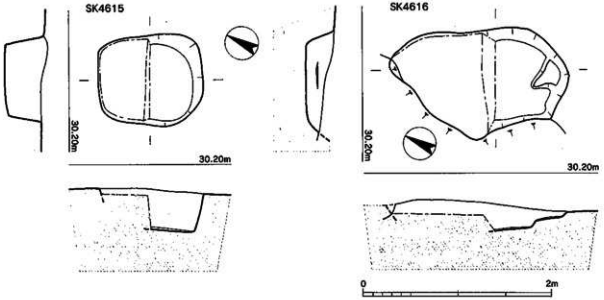


Fig.7　土坑SK4615・4616実測図（1/40）

より途切れているが，平面プランは楕円形を基調とする。深さは約0.3mで，埋土はＳＫ4615と同じく暗灰色粘質土である。埋土の状況からＳＫ4615と共に，ＳＸ4617の時期とほぼ同じであると考えられる。

整地層

ＳＸ4617（Fig.6）

調査区の中央部から南西にかけて，深さ約0.3～0.5mの落ちが広がっているが，その落ちを人為的に整地によって埋めている。埋土は暗灰色～青灰色粘質土もしくは灰～灰白色の砂層を基調とし，約0.1～0.2mの単位で層をなしている。土層からは須恵器，土師器，灰釉陶器，瓦など多くの遺物が出土しているが，それらの遺物の下限は９世紀代におさえることができるが，大半は８世紀前半のものである。

（4）出土遺物

ＳＫ4616出土土器（Fig.8）

須恵器

蓋（1）　口縁端部を直角に折り曲げるもの。径は復元できない小片である。

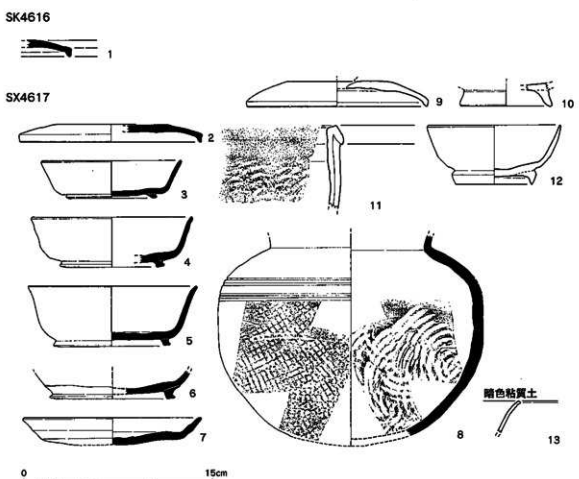


Fig.8　SK4616・SX4617・暗色粘質土出土土器・陶磁器実測図（1/3）

ＳＸ4617出土土器・陶磁器（Fig.8，PL.9）

須恵器

蓋（2）　口縁端部をほぼ直角に折り曲げる形態のもので，復元口径14.7cm。外天井部は回転ヘラケズリにより調整する。

坏（3～6）　いずれも高台が外側に踏ん張るいわゆる靴形の形態を呈するもの。3は復元口径10.3cm，底径7.3cm，器高3.0cm，4は口径12.9cm，底径8.4cm，器高4.0cm，5は口径13.5cm，底径9.4cm，器高4.8cm，6は復元底径10.0cmで，口縁部を欠く。

皿（7）　体部が斜めに立ち上がる形態で，口径14.3cm，底径11.5cm，器高2.15cm。底部は回転ヘラケズリの後，ナデの調整を行う。板状圧痕が残る。

壺（8）　底部が丸底を呈し，低い頸部を持つ短頸壺で，外面肩部に5条の沈線を持ち，その下に格子叩きが残り，内面には当て具痕が残る。復元最大径21.0cm。

土師器

蓋（9）　口縁部をやや折り曲げる形態のもので，復元口径14.6cm。明赤褐色を呈する胎土でかつ焼成は軟であるため，磨滅が激しい。内面は回転ヘラミガキで調整するも，その単位は非常に不明瞭である。

椀（10）　高台部のみ残存する破片で，1.3cmの高く外反する高台を呈する。高台径7.7cm。胎土は赤褐色～褐色を呈する。12の灰釉陶器と共に当該遺構出土遺物の中で，比較的新しい遺物と考えられる。

甕（11）　玉縁状の口縁部を呈し，寸胴形の形態を呈する。内面にタタキの当て具痕跡が残る。外面はヨコナデ調整。暗赤褐色を呈する。復元口径は約24cm。

灰釉陶器

椀（12）　ほぼ完形の個体だが，歪みが非常に激しい。断面が二等辺三角形に近い形態の高台を持つ。胎土は黒色粒の混じる灰色で，黒灰色の釉が部分的にかけられる。口径10.7cm，底径6.1cm，器高4.7cm。底部はヘラ切りのようである。

暗色粘質土出土陶磁器（Fig.8）

白　磁

皿（13）　体部から口縁端部までの破片。口縁部は外反し，全体に灰白色の貫入のある釉がかけられる。器壁の薄さから皿かもしくはⅠ類の碗と考えられる。図示していないがＳＸ4617から同様の白磁小片が出土しているため，元来ＳＸ4617に属するものである可能性は高いが，そうなると，当該遺構出土遺物の中では比較的新しい遺物であると考えられる。

瓦　類（Fig.9，PL.9）

丸瓦（1）　ＳＸ4617から出土したもので，玉縁をもつほぼ完形のもの。全体的に磨滅が激しいが，凸面にわずかに縄目の叩打痕が見られ，凹面には布目痕が見られる。最大長43.5cm，最大幅16.5cm，最大高8.9cmで，厚さは1.6～1.7cmである。

平瓦（2）　非常に湾曲の激しい完形の個体で，ＳＸ4617から出土した。凸面には明瞭に縄目の叩打痕が残る一方で，凹面には布目痕を縦方向のナデによってナデ消している。凹面の四周はヘラケズリにより面取りを行っている。最大長37.2cm，最大幅28.2cm，最大高8.3cm

で，厚さは1.5～2.0cmである。

転用硯 (Fig.10, PL.9)

須恵器蓋（1）　ツマミ部から口縁部までを残す破片で，口縁部は直角近くまで折り曲げられる。内面には墨痕及び擦痕が所々に残存する。ＳＸ4617から出土した。

漆付着土器 (Fig.10, PL.9)

須恵器壺（2）　長頸壺の頸部の破片で，頸部内面及び下側破面に黒色の漆が付着する。おそらく漆を小分けにして保管・収納するために使用されたもので，破面に漆の付着があることから最終的に破砕して漆が掻き出された際に付着したものであると考えられる。ＳＸ4617から出土しており，掲載した完形の丸瓦とほぼ同位置で出土している。　**漆付着土器の出土**

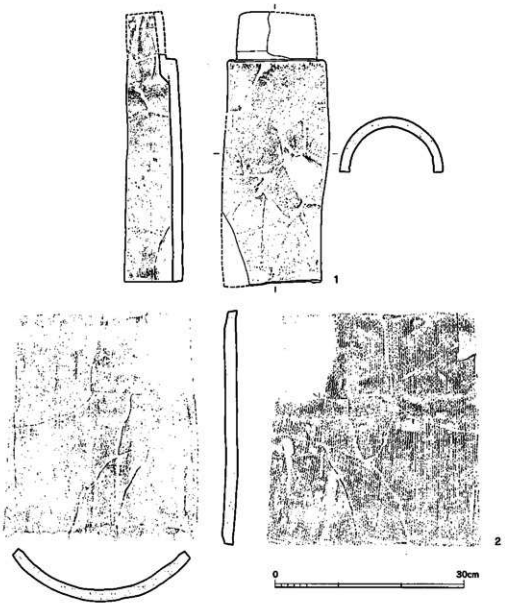


Fig.9　第193次調査出土丸・平瓦拓影・実測図（1/6）

土師器蓋（3）　接合面のない2片からの復元合成図である。別個体の可能性も否定できないが，共にＳＸ4617の同一地区から出土している。復元口径19.6cmで，外面は回転ヘラミガキで調整される。暗赤色の漆が内面及び外面口縁端部の一部に付着する。おそらく漆を塗布する際のパレットとして利用されたものと考えられる。

漆喰付着土器（Fig.10，PL.9）

須恵器甕（4）　平底の底部をもつ甕の底部片で，底面には板状圧痕と籾痕が見られる。内面には，白っぽい明褐色を呈する粉，もしくは石英粒状の付着物が見られる。この付着物はおそらく漆喰と考えられ，漆喰の運搬・保管に使用された容器と考えられる。このように漆喰と考えられる付着物が見られるものは，大宰府史跡ではあまり報告例はないが，報告されているものでは観世音寺出土例がある（九州歴史資料館2007）。

製塩土器（Fig.10，PL.9）

5はⅢ類底部の破片と考えられる。胎土は暗褐色を呈し，角閃石を含む粗いもので，底部は尖底を呈する。ＳＸ4617から出土した。当調査区では，他にⅡ類体部の破片がいくつか出土している。

鋳造・鍛冶関連遺物（Fig.10，PL.9）

鞴羽口（6・7）　共にＳＸ4617から出土したもので，共に断面の形状は外面に箆巻き状

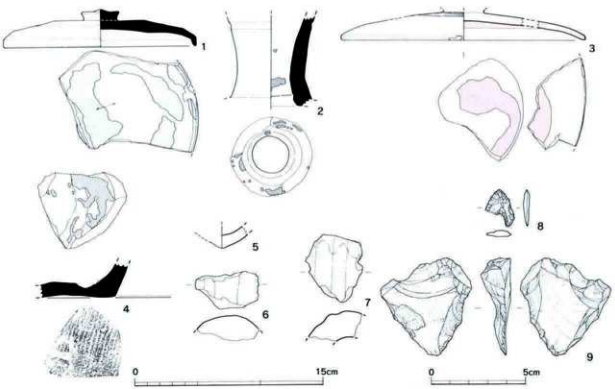


Fig.10　第193次調査出土転用硯・漆付着土器・石器等実測図（1/2・1/3）

の凹凸が見られる。凹凸は７の方が顕著で，７は外面上部は先端部に近いため，被熱により器壁の非常に粗い灰色を呈している。６は22.9g，７は38.2g。

また，この他にも当調査区から小片の鞴羽口が４点（10.8ｇ），鉄滓が３点（29.6ｇ）出土している。

打製石器（Fig.10，PL.9）

ＳＸ4617及びその上層からは縄文時代の石器２点及び剥片４点が出土している。全て二次堆積によるものである。

石鏃（8）　基部に深い抉りを入れる形状で，最大長2.0cm，最大幅1.55cm，最大厚３mm。左基端部を欠損する。重さ0.6ｇで，黒色の腰岳産と思われる黒曜石製である。表裏面に残る素材面から，不定形剥片を素材とするものであることが分かる。黄灰色土から出土した。

スクレーパー（9）　厚手の不定形剥片を素材とするもので，両側縁部に刃を作り出している。最大長5.1cm，最大幅4.8cm，最大厚1.6cm，重さ24.0ｇ。乳白色の姫島産黒曜石製。ＳＸ4617から出土した。

（5）小　結

今回の調査では，土坑２基と整地層１箇所を確認した。中でも整地層ＳＸ4617からは多くの遺物が出土した。遺物の時期を見ると，灰釉陶器や土師器椀などから９世紀に下限を押さえることができ，整地の時期がおよそ９世紀であることが分かる。しかし，出土した遺物の大半は，８世紀前半代と考えられる須恵器，土師器，瓦などであり，整地の時期を直接示すものではないものの，この調査区の近辺に８世紀前半代，すなわち政庁Ⅱ期造営の時期に関わるような遺構の存在を予感させるものである。また，漆付着土器や鞴羽口など，生産関連の遺物もいくつか確認できた。広丸地区では過去の調査でもこれらの生産関連遺物は出土しており，その存在については今後注意を要する。

整地の時期は９世紀頃

生産関連遺物の存在

これまで，広丸地区の南側に当たるこの周辺の箇所は，御笠川の氾濫により，遺構の残存があまり期待されていなかった地域であった。しかし，今回の調査により，希薄ではあるものの古代の遺構が確認されたことで，広丸地区の南限がさらに広がりを見せることが判明した。今後，範囲の確認も含めて，広丸地区官人居住域の内容について，さらに確認を進めていきたい。

【参考文献】
九州歴史資料館2007『観世音寺―遺物編２―』

3　第194次調査（大楠地区の緊急調査）

（1）調査概要

経　過　政庁跡の南側の一帯を九歴が行う経緯については第１節で述べたとおりである。大楠地区でも状況は同じであり，住宅建設の進捗状況に応じて調査を進めているところである。

今回の調査は大楠地区の宅地の新設に伴い実施した。太宰府市教育委員会及び地権者との協議により，計画調査の水城跡第39次調査と同時並行で平成17年11月９日に調査を開始し，まずは北半部から重機による掘削を行った。当初，北側の第125次調査区の調査成果から，遺構が希薄であると考えられたが，古代～中世の遺物を多く含む溝・土坑・整地層等が多数検出されたため，水城跡の調査を一時中断し，当該地の調査に全力を注ぐこととなった。12月２日に北半部の全景撮影を行い，９日には重機による反転・掘削を行って南半部の調査を開始したが，調査さなかの16日には当初予定していた不丁地区の第136-2次調査の開始により作業人員を割かざるを得なくなり，調査は難航した。しかし，21日に南半部の全景撮影を行い，12月27日には重機により埋め戻しを完了し調査は終了した。調査面積は105㎡である。

位　置　大楠地区官人居住域の西側にあたり，御笠川北岸の標高約31mの沖積地に立地している。今回の調査地はかつて南北溝ＳＤ2680・2700・2705が検出され，大楠官人居住域の西側の境界とされる第94次調査地の西側南端にあたる。地番は観世音寺２丁目166番である。

第94次調査地の南西部

（2）基本層序

本調査区の基本層序（Fig.11土層図）は，上層から現表土及び区画整理事業時の盛土（花崗岩バイラン土）が約70～80㎝堆積し，その下層に旧表土の灰色土(約10～30㎝)，旧耕作土(床土)の黄灰色土(約10㎝)が堆積し，地表下約90㎝(標高31.40m)で遺構面（地山・黄灰色土）に達する。その地山を掘り込んで，掘立柱建物・溝・土坑等の遺構が構築されている。

（3）検出遺構

今回の調査では，掘立柱建物２棟，溝３条，土坑２基，整地層１箇所のほか，ピット及び溝状遺構多数を検出した。

掘立柱建物

ＳＢ4620（Fig.12，PL.4）

調査区の中央やや南よりで検出された２×２間の総柱の掘立柱建物である。主軸はほぼ正南北で振れはなく，東西3.2m，南北3.0mで，東西の柱間は1.6m等間，南北の柱間は1.5m等間である。全ての柱穴を検出しているが，北側の柱穴はＳＤ2705Ａにより一部切られ，南側中央の柱穴はＳＢ4625の柱穴に切られる。柱穴の大きさは約0.4～0.6mとしっかりした印象を受ける。中央の柱穴のみ半裁しており，深さ約0.5mで，灰～灰褐色を基調とする埋土が確認された。出土遺物は半裁した柱穴から土師器が出土したが細片のため，報告は割愛した。

ＳＢ4625（Fig.12，PL.4）

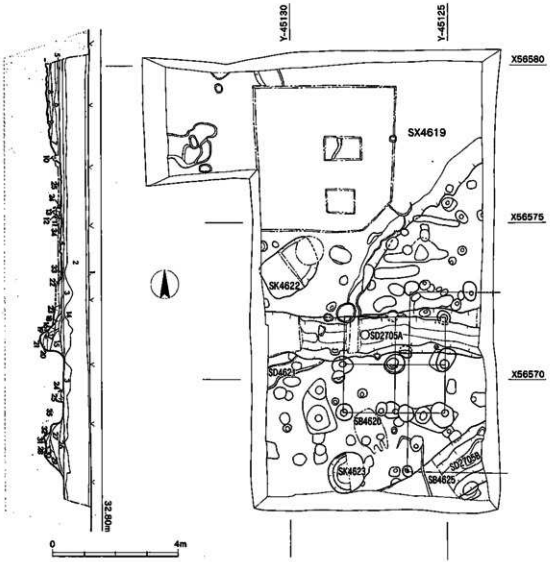
ＳＢ4620とほぼ重複する形で検出された。２(以上)×３間の南北棟と考えられるが，一部の柱穴は調査区外となるため，その規模については確定的ではない。主軸もＳＢ4620とほぼ

並行しておりN1°Eで，推定桁行（南北長）は5.6m，柱間は1.8・1.9mである。推定梁行の柱間は2.0mで桁行よりやや広い。出土遺物はないが，ＳＢ4620の柱穴を切っており，なおかつＳＤ2705Ａに切られているため，ＳＢ4620より新しく，ＳＤ2705Ａより古いと考えられる。

溝

ＳＤ2705Ａ・Ｂ（Fig.11，PL.4）

共に第94次調査で検出されたＳＤ2705が二股に分かれて続いていると考えられることか



1　暗褐色土（表土）
2　マサ土（明赤褐色土）
3　灰色土（旧畑作土）
4　灰茶色土（床土）
5　4に5Mがやや混じる（床土）
6　暗褐色土（遺物多し）
7　灰褐色土（　〃　）　SX4619 掘地府
8　7層にやや褐色土が混じる（　〃　）
9　8Mに黄褐色土（地山）ブロックが混じる（　〃　）
10　灰褐色土（暗褐色土が混じる。ピット？）
11　12層に13層が混じる
12　暗褐色土（灰褐色土や中砂混じる。柱痕）　柱穴埋土
13　暗褐色土（黄褐色土が混じる。柱穴掘方埋土）
14　オリーブ灰色土
15　暗褐色土（粘性強）
16　灰褐色土（15層やや混じる）
17　灰褐色土
18　15層と同じ　SD2705A埋土
19　暗褐色土（灰褐色土が混じる）
20　灰褐色砂（粘性土混じる）
21　灰色砂（やや粘性土混じる）
22　灰褐色土（黄褐色土及び灰褐色土混じる）（遺物混じる）
23　暗灰褐色砂（地山の可能性あり）
24　灰色土（床土）（潰状遺構（新しい））
25　灰色土に黄灰色が混じる（柱穴埋土）
26　褐灰色土
27　暗褐色土
28　灰色砂（粘性の非常に強い灰色土がブロックで混じる）
29　灰褐色土（粘性強い）
30　灰黄色粘性土（粘性非常に強く，しまり強）
31　灰褐色砂（灰色粘性シルト混じる）
32　34層に26層（地山黄灰色粘性土）ブロック混じる　SD2705B埋土
33　黄褐色土（粗砂混じる。地山の可能性あり）
34　黄灰色土（やや粗砂混じる。地山）
35　黄褐色土（シルト混じり。地山）

Fig.11　第194次調査遺構配置図・土層図（1/120）

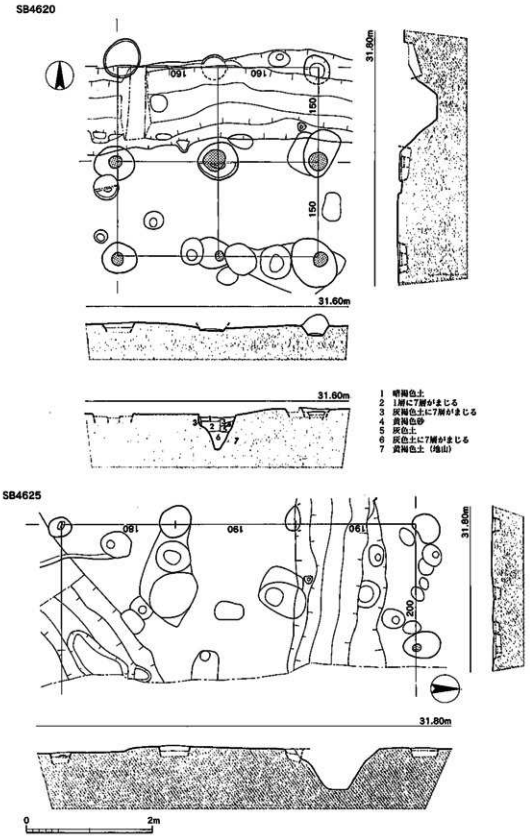


Fig.12　掘立柱建物SB4620・4625実測図（1/60）

ら，北側の東西溝をＳＤ2705Ａ，南東隅の斜行する溝をＳＤ2705Ｂとした。これら２本の溝は調査区内では切れ合わないため，その前後関係は分からず，ＡとＢは便宜的に与えているのみである。2705Ａは調査区のほぼ中央を正東西方向に走る溝で，幅約0.6～0.7m，深さ約0.6～0.7mで約3.5m分検出した。溝底のレベルから東から西へ向かって低くなっている。前述のようにＳＢ4620・4625を切っているが，ＳＤ4621・ＳＸ4619とは埋土の状況が非常に類似しており，その前後関係についてはよく分からない。2705Ｂは調査区の西南隅に北東から南西に向かって斜行する溝で，幅0.7～0.8m，深さ約0.6～0.7mで約２m分検出した。溝底のレベルと見ると，東側の方が低くなっているが，掘削面積が狭いため，局地的な凹みである可能性も考えられる。2705Ａの状況から推測して，大局的には西側の方が低くなっていると見られる。幅・深さとも，Ａ・Ｂ共に類似しており，同一の規格によるものと考えられる。また，共に古代の遺物を多く出土したが，Ａからは少数ながらも糸切りの土師器坏や龍泉窯系の青磁碗等も見られ，これらの溝の最終埋没は13世紀代まで下る可能性が高い。

SD2705A・Bの埋没は13世紀頃

ＳＤ4621（Fig.11，PL.4）

調査区中央部の西よりで検出され，幅0.2m，深さ約0.05mと非常に小規模な溝である。ＳＤ2705Ｂとほぼ並行する。出土遺物はない。

土　坑

ＳＫ4622（Fig.13，PL.5）

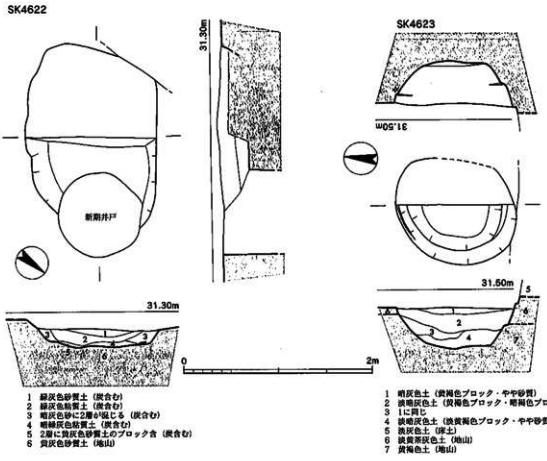


Fig.13　土坑SK4622・4623実測図（1/40）

調査区のやや北よりで検出された。整地層ＳＸ4619を掘り下げた所で検出したが，埋土が類似しており，整地層上面から掘り込んでいるのか，下層の地山上面から掘り込んでいるのかはよく分からない。長軸約1.9～2.0m，短軸約1.4mの長楕円形を呈し，北東隅は昭和時代の井戸により切られる。深さは約0.3mで暗灰～暗緑色を基調とする粘質土や砂質土の埋土が見られる。遺構内からは土師器・黒色土器・越州窯系青磁碗・平瓦片などが出土しているが，いずれも遺構形成時期よりもかなり古い時期のものである可能性が高い。

ＳＫ4623（Fig.13，PL.5）

調査区の南端部で検出され，南北約1.3m，東西約1.1mのやや南北に長い円形を呈する。深さは約0.4～0.45mで，一部二段に掘り込まれている箇所もある。出土遺物は砥石のみであるため，時期はよく分からないが，その形状から溜桝的な機能が想定される。

整地層

ＳＸ4619（Fig.11，PL.4）

調査区の北半部に広く広がる落ちを人為的に埋めた整地層である。調査区の中央から北東部にかけて落ち始め，深さ約0.4mを暗褐～灰褐色の粘性土により整地して平坦化する。整地層の下層の地山面は平坦であるものの，小規模な凹凸が多数確認でき，整地する直前は遺構面としてはあまり利用されていなかった可能性が高い。実際，整地層を地山面まで掘り下げた部分ではＳＫ4622を除き，ピットなどの遺構はわずかにしか検出されていない。整地層の埋土からは８～９世紀を中心とする大量の古代の須恵器・土師器・瓦のほか，製塩土器・鋳造関連遺物等も出土している。しかし，ＳＤ2705Ａと同じく13世紀代にまで下るような龍泉窯系の青磁碗も出土しており，整地の時期は13世紀代と考えられる。

整地の時期は13世紀

この整地については第94調査区南半部で検出された暗褐色土層・暗灰色土層，第125次調査区で検出された茶褐色粘質土・茶灰色粘質土層と一連のものであると考えられる。

第94・125次で検出された土層と一連のものか

（４）出土遺物

ＳＤ2705Ａ出土土器・陶磁器（Fig.14，PL.10）

須恵器

蓋（１）　口縁端部を明瞭に直角に折り曲げる形態のもので，ツマミ部を欠く。復元口径14.4cm。外天井部は回転ヘラケズリにより調整する。

坏（２・３）　２はやや小さい高台を持つ形態で，復元底径11.6cm。口縁部を欠く。３は高台を持たないもので，復元口径14.8cm，復元底径10.0cm，器高4.1cm。底面は回転ヘラケズリの後ナデによる調整。

土師器

坏（４）　口径14.4cm，底径11.5cm，器高2.9cmでほぼ完形を呈する。底部は糸切りで，板状圧痕を残す。当該遺構出土遺物の中で新しい一群に属する。

椀（５・６）　５は復元高台径7.5cmで，先端部が尖り気味の高台をもつ。６は高台径9.0cmで，外反する形態の高台を持つ。共に底部はヘラ切りによる。

灰釉陶器

壺（７）　体部の破片で，黒色斑点の混じる白色の胎土に，外面のみ淡緑色の釉がかかる。

釉調の一部には不透明な水色を呈する部分も見られる。

白　磁

碗（8）　やや不明瞭な玉縁を持つ口縁部の破片で，Ⅳ類と考えられる。残存部全体がやや暗めの白色釉によって施釉されている。

青　磁

碗（9～11）　9・10は越州窯系で，共に内面に目跡を残す。9は高台畳付部をカキ取る他は全面施釉されるⅠ-2類。釉調は緑灰色を呈する。10は，外面体部下半以下は露胎となり，底部は回転ヘラケズリにより上げ底状の平底を呈するⅡ-3類。貫入のある暗緑色の釉がかかり，露胎部の表面は暗赤色を呈する。11は龍泉窯系の体部片で，全体に貫入及び気泡の入る暗緑色の釉が厚くかかる。外面には鎬蓮弁の隆起部が残る。11は4の土師器坏と共に新しい一群に属し，溝の最終埋没年代を示す。

壺（12）　高台畳付部をカキ取る他は全面施釉される越州窯系のもので，碗Ⅰ類に近いものと考えられる。釉調は暗緑灰色で，胎は灰褐色を呈する。底径9.0cm。

ＳＤ2705Ｂ出土土器（Fig.14）

須恵器

坏（13）　体部が外反気味に開く形態のもので，復元口径9.2cm，復元底径6.6cm，器高3.1cmと非常に小型のものである。

皿（14）　復元口径17.0cm，復元底径13.0cm，器高2.5cmで，底部はヘラ切り。口縁端部は非常に屈曲して外反する。

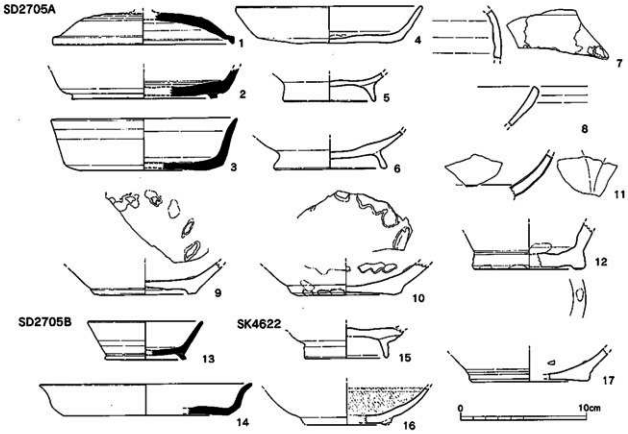


Fig.14　SD2705A・B，SK4622出土土器・陶磁器実測図（1/3）

ＳＫ4622出土土器・陶磁器（Fig.14，PL.10）

土師器

皿ｃ（15）　高さ1.5cmの高く直立する高台を持つ破片で，いわゆる「托」の形態を呈するものである。復元高台径6.7cm。

黒色土器

椀（16）　内面のみ黒色に燻されるＡ類。高台端部は欠損しているため明瞭であるが，復元高台径は約6.6cmである。

青　磁

碗（17）　口縁部を欠き，現状では内面のみ白濁した緑黄色の釉がかかる越州窯系のⅡ-２・ｂ類。内面に目跡を残す。

ＳＸ4619出土土器・陶磁器（Fig.15，PL.11）

須恵器

坏（１・２）　共に高台を持つ形態で，復元底径は，１は8.4cm，２は9.8cmである。

甕（15・16）　復元口径は，15は19.6cm，16は22.3cmで共に外面に格子状タタキ，内面に当て具痕を残す。15は赤褐色であるのに対し16は灰色に暗緑色の自然釉がかかる。

土師器

坏（３～５）　いずれも底部ヘラ切りで，口径11.4～13.2cm，底径6.6～7.2cm，器高3.1～4.0cm。寸法にばらつきがあることから時期的にもばらつきがあるようである。

皿ｃ（６）　高い高台に非常に外傾する体部を持ついわゆる「托」の形態のもの。口径13.0cm，高台径7.8cm，器高2.7cm。底部には板状圧痕が残る。おそらくはヘラ切りか。

椀（７）　口縁部を欠くもので，復元底径7.0cm。暗褐色を呈する。

台付鉢（17）　径19.3cm，高さ約６cmの大きな台が付いたもので，体部から口縁部にかけてラッパ状に開く。内面はケズリにより調整されるが，磨滅により単位については不明。

カマド（18）　移動式竈の焚き口部分の破片。いくつか接合しない他の破片もあるが，最も形状の分かる大きなものを掲載した。つばの部分はユビナデにより粗雑に整形される。内面は使用により煤が付着する。胎土は褐～暗褐色を呈する。

黒色土器

椀（８・９）　共に内面のみ黒色に燻されるＡ類。８の方が９に比べやや高い高台を持つ。復元底径は，８は7.4cm，９は8.2cm。８の内面に一部ヘラミガキが確認できる。

緑釉陶器

椀（10）　体部の小片。内外面とも淡緑色の釉により施釉される。胎土は灰色の須恵質。

青　磁

碗（11～14）　11・12は越州窯系で，11は底部露胎で蛇の目高台を持つ。見込みに目跡を４箇所残す。12は高台畳付部のカキ取りを除いて全面施釉される。13・14は龍泉窯系で，13の外面には鎬蓮弁（鎬は不明瞭）が施され，全面に気泡・貫入のある暗緑色の釉がかかるⅠ-５類。14は内外面とも貫入のある緑灰色の釉がかかり，無文のⅠ-１類。この龍泉窯系青磁碗がＳＸ4619の整地行為の時期を示していると考えられる。

その他の層位出土土器・陶磁器（Fig.15，PL.11）

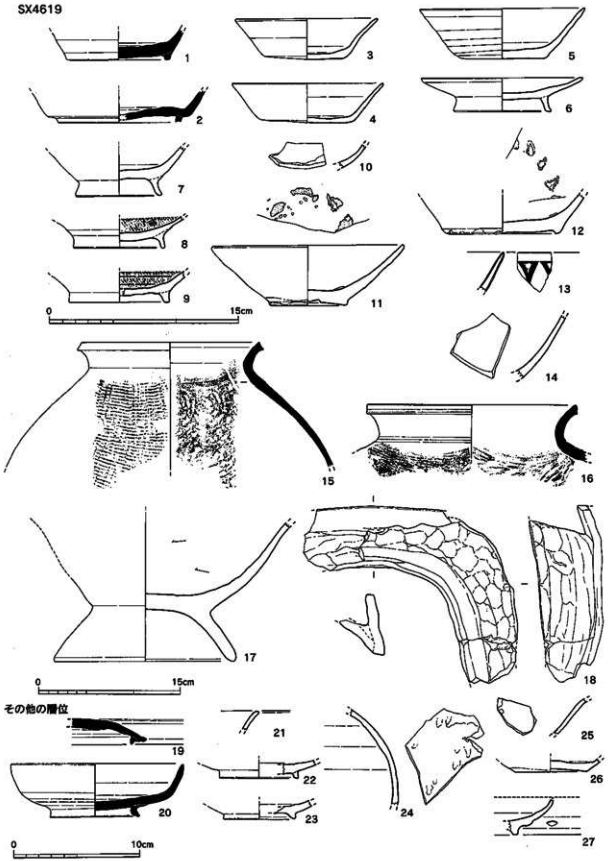


Fig.15　SX4619・その他の層位出土土器・陶磁器実測図（1/3・1/4）

須恵器

蓋（19）　非常に明瞭な返りを有する７世紀後半代のもの。外天井部は回転ヘラケズリ。灰褐色土から出土した。

坏（20）　19と近接する時期のもので，復元口径13.8cm，底径7.2cm，器高4.2cm。胎土は暗赤灰色を呈し，外反屈曲の明瞭な高台を持つ。遺構面上から出土した。

緑釉陶器

椀・皿（21～23）　21・22は緑色の釉がかかり，灰色の須恵質の胎土のもの。22の残存する外面は露胎で，復元高台径は6.4cm。23は暗黄緑色の釉がかかり，明褐色の土師質の胎土のもので，復元高台径は5.8cm。すべて暗褐色整地土層から出土した。

灰釉陶器

壺（24）　肩部から体部にかけての破片。外面には貫入のある緑灰色の釉がかかり，内面は露胎。黒色斑点のある灰白色の胎土。暗褐色整地土層から出土した。

白　磁

碗（25）　やや端反り気味の体部片。内外面ともやや青みがかった白色の釉がかかる。質も良いため，Ⅰ類か。Ｓ－34から出土した。

皿（26）　平底で底部露胎のⅨ-２類のもの。底径5.6cm。重機掘削時に出土した。

瀋青釉陶器

杯（27）　高台を持ち，体部下半の外面に円形突起文を付する。明灰色の胎に透明感のない灰青色の釉がかかる。口縁端部は欠損。北宋代の鈞窯系かそれに類するものと考えられるが不確か。重機掘削時に出土した。

瓦　類（Fig.16，PL.12，Tab.6）

瓦類は以下に報告する軒先瓦，文字瓦の他に，格子目・縄目などの叩打痕の付いた丸・平瓦も多く出土している。

軒丸瓦（１～４）　１は224a型式。外区約2/3が欠損。２は275B型式のいわゆる老司Ⅱ式。外区に凸鋸歯文４個，珠文９個，内区に蓮弁２弁が残存する。３は286型式で，これまで観世音寺境内でしか出土していないもの。政庁域では初の出土である。４は290Ｂ型式で，内区部分のみ磨滅しながらも残存する。１・２・４はＳＸ4619から出土し，３はＳＤ2705Ｂから出土した。

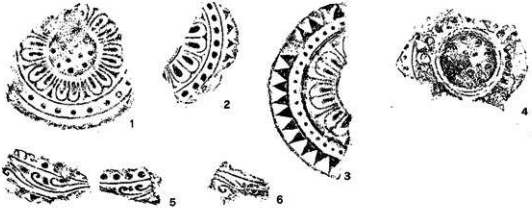


Fig.16　第194次調査出土軒丸瓦・軒平瓦拓影（1/4）

軒平瓦（5・6）　5は560B型式のいわゆる老司Ⅱ式。SX4619から出土。6は内区に偏行唐草文が見られるが型式は不明。これもSX4619から出土した。

文字瓦　今回の調査で4種6型式17点が出土した。その内容はTab.6のとおり。「平井瓦」銘の901BとC型式の出土が目立つ。その他，「筑」銘（906C），「小□瓦」銘（910），「八年」銘（917）などがある。

Tab.6　第194次調査出土文字瓦一覧

型　式	点　数			小 計
	丸瓦	平瓦	丸・平不明	
901B	0	6	0	6
901C	4	0	1	5
901Hc	1	0	0	1
906C	0	1	0	1
910	0	3	0	3
917	0	1	0	1
小　計	5	11	1	17

鉄製品（Fig.17，PL.12）

刀子（1）　刃先の部分のみ残存する。残存長3.0cm，残存幅1.1cm，重さ2.0g。暗褐色整地層から出土した。

釘（2）　断面が6mm四方の方形を呈し，中程で約60°折れ曲がる。頭部及び先端は欠損する。暗褐色整地層から出土した。重さ4.3g。

不明製品（3）　幅約2.5cm程の薄い鉄板を上下端から折り曲げ，さらに右側端部を折り曲げている。用途はよくわからない。重さ3.8g。SD2705Aから出土した。

鉄板状製品（4・5）　共に灰褐色整地層から出土しており，厚さは4は4mm，5は3mmで，非常に類似するものの，若干厚みが異なる。4は5.5g，5は1.4g。

棒状製品（6）　厚さ5mmで，断面逆L字状を呈する。用途はよくわからない。重さは6.7g。灰褐色整地層から出土した。

石製品（Fig.17，PL.12）

滑石石鍋転用品（7）　明灰色の滑石製で，おそらく石鍋を転用し，文鎮状の長方形の製品に転用したものか。中心部には径7mmの穿孔が一つ残る。重機掘削時の出土。重さ94.3g。　**文鎮状の滑石製品**

砥石（8～11）　いずれも上下左右の面を非常によく研磨されている。8は片岩製で143.7g，9・10は砂岩製で，順に374.3g，131.9g，11は頁岩製で24.8g，8・10はSX4619，9はSK4623，11はSD2705Aから出土した。

玉石（12～22）　12・13・15は白色の石英製。14は白色の片岩製。16・19～22は灰緑色の緑泥片岩製。17は黒灰色の頁岩製，白色及び黒灰色のものは碁石として使用されたものか。18は灰色の砂岩製。重さは順に2.5g，2.6g，1.7g，0.6g，2.4g，1.4g，2.7g，2.2g，1.1g，0.8g，0.8g。15～18，21はSX4619から出土した。

土製品（Fig.17，PL.13）

土玉（23）　径1.3cmのほぼ球形の褐色で，重さ1.8g。SD2705Aから出土した。

土錘（24）　最大長3.7cm，最大幅1.7cmの断面正円形で，長軸方向に穿孔される。暗褐色整地層から出土した。重さ10.3g。

墨書土器（Fig.17，PL.13）　**墨書土器**

須恵器坏（25）　底面の一部のみ残存する破片。外底部に2本の線が直交するように墨書されるが，いかなる字であるかは不明。S－34から出土した。

磯（Fig.17，PL.13）

円面硯（26）　圏足円面硯の脚部下端部片。透かし孔の幅が3.0cmであり，非常に大型のもの。ＳＸ4619から出土した。

須恵器蓋転用硯（27～30）　いずれも内面に擦痕を残し，29と30には墨痕も残る。27はＳＸ4619，29・30はＳＤ2705Ａから出土。28は出土地点不明。

須恵器坏転用硯（31）　高台を持ち，内面底部に擦痕と墨痕を残す。ＳＸ4619から出土。

漆付着土器（Fig.17，PL.13）

須恵器蓋（32）　内面にわずかに黒色系の漆が付着する。ＳＤ2705Ｂから出土した。いわゆる漆塗りのパレットとして利用されたものか。

須恵器坏（32）　外へ張り出す高台を持つもの。内面のみ黒色漆付着。ＳＸ4619出土。

須恵器甕（33）　小片のため，大きさ不明。内面の当て具痕の溝に黒色漆が残存する。ＳＸ4619から出土した。漆の保管・運搬用のものか。

製塩土器（Fig.17，PL.13）

35はII類の口縁部片で復元口径12.0cm，体部の厚み1.7cmで，かなり大型の部類に属する。内面には布目痕が残る。36～38は甕形を呈するＩ類で外面に叩きを持つ。36・37は細かい格子状の叩きで同一個体と考えられる。38は外面に縦位の不整方向の叩きが見られる。内面は不明瞭ながらも当て具らしき痕跡が僅かに残る。全てＳＸ4619出土。

鋳造・鍛冶関連遺物（Fig.17，PL.13）

鞴羽口（39～41）　39は断面円形を呈し，淡い明褐色を呈する。体部の厚みは2.1cm。40は先端部の破片で外面に黒色溶解物が付着。41も先端部付近の破片で強い被熱により暗灰色。重さは順に19.3ｇ，12.3ｇ，15.5ｇ。39はＳＸ4619，40・41はＳＤ2705Ａ出土。

取瓶（42）　口縁端部の破片で，厚さは1.0cm。灰白色の粗い胎土で，暗紫紅色や黄色の溶解物が付着する。銅の鋳造に用いられたものか。重さ6.5ｇ。ＳＸ4619出土。

炉壁溶解物（43）　赤褐色～灰色の粗い胎土に紫紅色の溶解物が付着する。炉壁もしくは羽口などが溶解したものと考えられる。重さ4.7ｇ。ＳＸ4619出土。

鉄塊系遺物（44）　ギラギラ光る黒色の地に明褐色の酸化土砂が付着する。ズシリと重く，重さ13.0ｇ。メタル度は銹化（△）でＳＸ4619出土。

銅塊（45・46）　共に全体的に緑青を吹き，ズシリと重い。メタル度はし（●）もしくは特し（☆）。重さは順に14.9ｇ，37.2ｇ。45は耕作土，46はＳ－53出土。

不定形鉱滓（47）　流動状に皺が入る黒色で破面がギラギラと光る。所々，明褐色の酸化土砂に覆われる。重さ17.1ｇ。ＳＸ4619出土。

椀状鉱滓（48～50）　いずれも明褐～褐色を呈し，底面には酸化土砂が面的に付着する。49の平面上位には鞴羽口の先端部が溶着したと考えられる黒色溶解物が見られる。重さは順に66.3ｇ，81.8ｇ，98.4ｇ。48は暗褐色整地層，49はＳＤ2705Ａ，50はＳＫ4622出土。

（5）小　結

今回の調査では，主な遺構として掘立柱建物２棟，溝３条，土坑２基，整地層１箇所が検出された。掘立柱建物２棟については，大楠地区では第94次調査区の南北溝ＳＤ2680・2700・2705より西側において初めて検出された例となる。建物の規模等は従来見つかってい

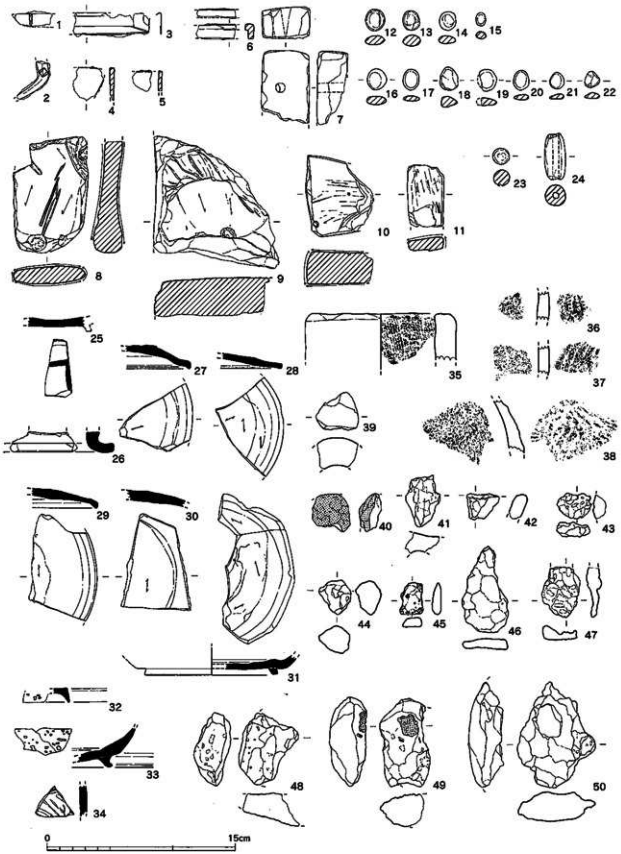


Fig.17　第194次調査出土鉄製品・石製品・土製品等実測図（1/3）

るものとさほど変わりはないため，大楠地区官人居住域の居住様相を示すものと考えてさしつかえないと思われる。出土遺物がないため，確定的ではないが，他の調査区での建物の年代から９～10世紀代と考えられる。

大楠地区の最も西側の建物

検出された溝の内，ＳＤ2705ＡとＢの２条は，第94次調査区で検出された南北溝ＳＤ2705から二股に分かれて続くものであり（Fig.18），従来は12世紀前半代の埋没と考えられていたが，今回の調査で龍泉窯系青磁碗が出土しており，13世紀代まで埋没年代が下る可能性がでてきた。また８世紀代とされるＳＤ2680は，条坊域における右郭三坊路を北へ延長したラインと重なることから，大宰府条坊側のプランにのっとった配置である指摘がなされている（狭川1991）。さらに11世紀後半代を下限とするＳＤ2700と，12～13世紀代を下限とするＳＤ2705はＳＤ2680を踏襲しつつ掘削し直された南北溝であると考えられる。今回検出したＳＤ2705Ａ・Ｂは他の２本とは異なり，途中で二股に分かれ，西に約45°と直角に屈折する。この溝の屈折の理由については現段階では解答を持ち合わせていないが，直角に屈折する2705Ａは正東西方向であることから条坊ラインを意識した配置であることは間違いないであろう。今後この溝の性格について今後の周辺の調査成果とも合わせて考えて行くべきであろう。

条坊ラインを意識した溝の配置

また，調査区北側で検出された整地層ＳＸ4619を始めとして，13世紀代にこの地区を整地平坦面化していることもわかってきた。おそらく先述のＳＤ2705Ａ・Ｂもこれらの整地に伴い，人為的に埋められたと考えられる。この整地行為は第94次調査区南半部西側の落ちを埋めている暗褐色・暗灰色土層や，第125次調査区で検出された土坑の上層に位置するとされる茶褐色・茶灰色粘質土層とも一連のものである可能性が高い。今後，この13世紀代に位置づけられる整地の広がりとその意味を考えていくことも，大楠地区の官人居住域の推移を考える上でも重要になってくると考えられる。

13世紀代の整地行為

【参考文献】
狭川真一1991「大宰府条坊跡の復原―発掘調査の成果から―」『条里制研究』６号　条里制研究会

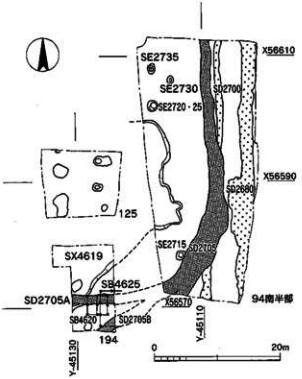


Fig.18　第94・125・194次調査主要遺構配置図（1/600）

Ⅲ　観世音寺子院跡の調査

Ⅳ　大宰府史跡採集品寄贈資料

Ⅲ　観世音寺子院跡の調査……31
1　第195次調査（安養寺地区の緊急調査）……31
(1)　調査概要……31
(2)　基本層序……32
(3)　検出遺構……32
(4)　出土遺物……34
(5)　小　　結……39
2　第195次補足調査（安養寺地区の立会調査）…41
(1)　調査概要……41
(2)　基本層序……41
(3)　小　　結……42
Ⅳ　大宰府史跡採集品寄贈資料の紹介……45

1　第195次調査（安養寺地区の緊急調査）

（1）調査概要

経　過　大宰府史跡の一つである国史跡「観世音寺境内および子院跡」は，九歴が開館以来，長らく史跡の内容解明のために計画的に確認調査を行ってきた。その内，境内部分については平成18年度に正式報告書の刊行を完了したことをもって，九歴の観世音寺境内における調査は一段落ついた状況にある。しかし，境内の背後に広大に広がる子院（49子院）地区については，現在も内容解明のための調査を継続している。この子院地区の内，特に字安養寺地区について，近年，住宅建設及び法面工事に伴い，第184・185・189次調査など幾つかの調査を行い，成果をあげてきている。今回の調査は，個人住宅の改築に伴い調査を行った。

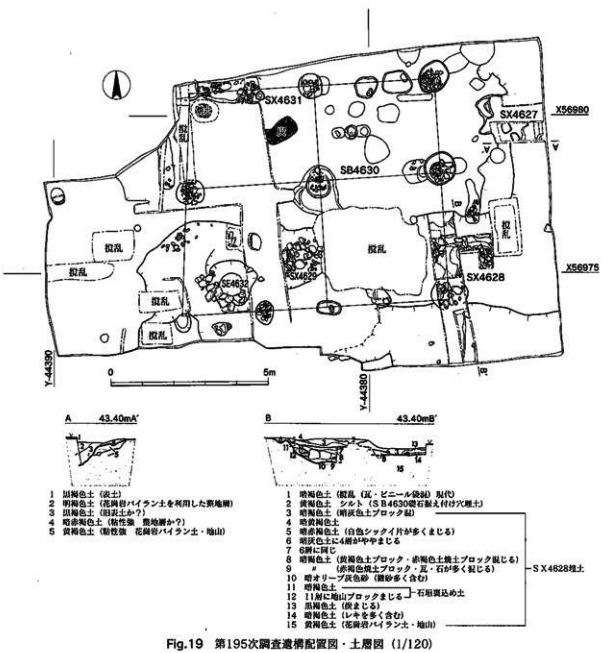


Fig.19　第195次調査遺構配置図・土層図（1/120）

Ⅲ　観世音寺子院跡の調査

既に第136-2次調査が始まっていた平成18年1月17日に調査を開始した。地表面から遺構までの深さが非常に浅かったこともあり掘削も順調に進み，19日には全景撮影を行い，測量の後，1月31日には終了した。調査面積は135㎡である。

位　置　調査地は子院跡の一つ安養院跡の推定地の南端のさらに南側にあたる箇所で，地番は観世音寺4丁目785番である。中世安養院に関連すると考えられる建物跡等が検出された第184次調査地の南西側にあたる。

（2）基本層序

本調査区の基本層序（Fig.19土層図）は，上層から表土（深さ約5㎝）の直下に，北半部では黄褐色土の花崗岩バイラン土の地山層に連する。調査区東端部では，平安時代後期の整地層が約40～50㎝堆積し，その下層に地山層が形成される。また，調査区南半部では，19世紀代の整地層が約80㎝堆積し，その下層に地山層が認められた。

（3）検出遺構

今回の調査では，平安時代後期の整地層1箇所のほか，近世後期（19世紀代）の礎石建物1棟，井戸1基，埋甕遺構1基，集石遺構1箇所，整地層1箇所が検出された。

礎石建物

ＳＢ4630（Fig.20，PL.6）

調査区のほぼ全体を覆い尽くすように検出された東西長7.7～8.3m，南北長7.1～7.15mの2×4間の礎石建物である。礎石は全て抜き取られ，礎石据え付け穴13個の内，8箇所で根石が確認された。主軸はN4°Wであるが，西側の梁は若干他に比べて軸が振れており，南西隅の据え付け穴は，もしかしたら当該遺構に伴う穴ではなく，既に南西隅の据え付け穴は削平されている可能性も否定できないが，南西側に井戸ＳＥ4632が存在するための結果であるのかもしれない。桁行の柱間は1.7～2.6mとかなりばらつきはあるが，概ねその間隔は北側と南側で対称になっているようである。中央の桁は2間で，東側の柱間は3.8m，西側の柱間は4.15mであり，南北両側の桁の柱間を反映した結果となっている。また，梁行の柱間は3.2～3.95mであるが，これも桁同様，その間隔は東側と西側でほぼ対称になっている。北側の据え付け穴については地山層もしくは薄い整地土層上から掘り込まれているが，南側の据え付け穴はＳＸ4628の上層から掘り込まれているため，ＳＸ4628の整地が行われた後に建てられた建物であることが分かる。恐らく今回の改築に伴い解体された建物が建てられる直前（幕末～明治初期）まで建っていた建物であると考えられる。

19世紀代の礎石建物

井　戸

ＳＥ4632（Fig.19）

調査区中央部南側に位置する近世の井戸で，掘形の直径1.4～1.5mの不整形を呈し，南側に石組みが残存する。北～東側には石組みは見られなかったが，より下層には残存しているかもしれない。井戸穴は直径約0.7mの正円形できれいな花崗岩バイラン土で埋められていた。南側の石組みには穴の形を円形にするために石を加工した痕跡も確認された。近世の遺構であるため，遺構の検出段階で掘り下げをやめているため，出土遺物の検出もなく，深さについても

不明である。ＳＸ4628の上層から掘り込まれていることと，今回改築された建物使用時には既に埋められていたことを考えると，礎石建物ＳＢ4630に伴う遺構であると考えられる。

礎石建物に伴う井戸

埋甕遺構

ＳＸ4631（Fig.19・20）

ＳＢ4630の柱穴の一つを切るように据えられた甕で，検出した時には中に消し炭が充填されていた。周辺の遺構面上に焼けた痕跡が見られたことや，今回改築された建物の当該部分が台所であったことを考えると，今回改築された建物の台所において，かつて消し炭壺として利

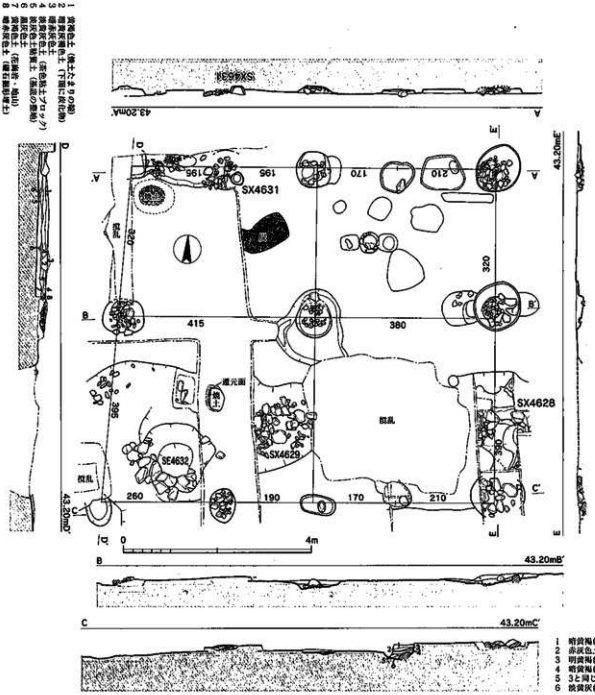


Fig.20　礎石建物SB4630実測図（1/80）

用されたものであると考えられる。

集石遺構

ＳＸ4629 (Fig.19)

調査区のほぼ中央南よりで検出した。1.0～1.2m四方の範囲に20～30cm程の石が集積していた。それらの石に混じり，瓦や陶磁器なども検出された。ＳＸ4628の上層に構築されている。性格についてはよく分からない。

整地層

ＳＸ4627 (Fig.19，PL.7)

調査区の東端部に南北に細長く東側に落ちる落ちを検出した。その落ちは平安時代後期の遺物を含む褐色の土により人為的に埋められていた。おそらく平安時代後期に行われた整地の痕跡であると考えられる。検出した範囲での最大の深さは0.7mだが，さらに東側に向かって落ちている。

平安時代後期の整地層

ＳＸ4628 (Fig.19，PL.7)

調査区の南半部に広く広がる落ちを人為的に埋めたものである。落ちの東側の一部を深掘りしたところ，若干の攪乱が入るものの，落ちの斜面に石積み（３段が残存）が築かれ，その前面に大量の瓦の集積が確認された。おそらくＳＢ4630を建てる際に行われた整地で，検出された大量の瓦は，それ以前に建っていた建物に伴う瓦であると考えられる。整地土には，瓦と共に多くの焼土ブロックも混じっていたため，火災により建て替えられた可能性も考えられる。出土遺物にコバルト発色の呉須の染付があることから，19世紀前半～中頃に位置づけられる。

（4）出土遺物

ＳＢ4630出土陶磁器 (Fig.21，PL.14)

無釉陶器

摺鉢（1）　ＳＢ4630の北側中央の掘え付け穴から出土した。黒色粒を含む暗黄褐色の胎土で，内面には使用されスベスベになった擦痕と，若干の摺り溝が残る。復元底径13.0cm。

ＳＸ4627出土土器・陶磁器 (Fig.21，PL.14)

土師器

坏（2）　復元底径11.0cm。底部ヘラ切りで丸底を呈する。黄褐色の胎土。

白　磁

碗（3）　低い高台が削り出され，体部下半以下が露胎となるⅣ-１・a類。底径7.4cm。

ＳＸ4628出土陶磁器 (Fig.21，PL.14)

染　付

皿（4）　内面見込みに２艘の船が描かれ，外面には「□福寿」の文字のほか絵柄も見られる。呉須はコバルト発色による。やや青みがかった白色の釉がかかる。復元底径4.0cm。

碗（5・6）　５は口縁部がやや内傾する形態で，外面及び見込みに鳥等を描く。復元口径7.9cm。６は遺構内の攪乱から出土した。外面に梅と草を描く。復元口径10.2cm。

角皿（7）　内面に雨降り文と細線を10本ほど描く。コバルト発色の呉須。

白　磁

湯呑（8）　体部が直立的に立ち上がり，口縁部が端反りになる形態。復元口径8.6㎝，底径3.8㎝，器高6.4㎝。高台畳付部は釉ハギが見られる。

陶　器

褐釉壺（9）　暗褐色の胎土に黒褐色の釉が厚くかけられる。最大径8.2㎝，底径3.9㎝。体部下半以下は露胎。底面は糸切りによる平底。

黄釉洗（10）　口縁端部が折縁状になる大型のもので，黄褐色の釉を全体にかけた後に不

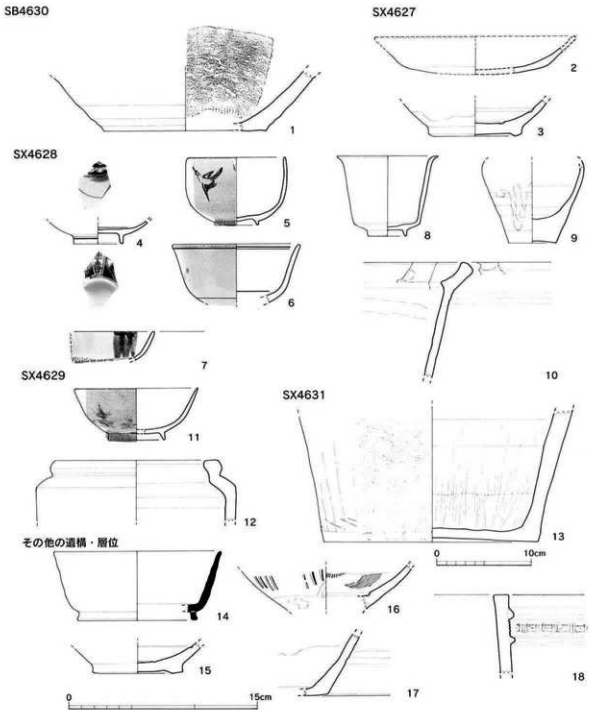


Fig.21　第195次調査出土土器・陶磁器実測図（1/3・1/4）

透明な水色・暗褐色の釉を二度がけする。

ＳＸ4629出土土器・陶磁器（Fig.21，PL.14）

染　付

碗（11）　体部が大きく開く形態。復元口径9.9cm。外面に松らしき植物を描く。白濁の激しい滲藍色の呉須。

瓦質土器

鉢（12）　口縁部が内傾する。復元口径13.8cm，復元最大径16.0cm。外面には燻しがかかり，丁寧なヘラミガキが，内面にはヨコナデが施される。

ＳＸ4631出土陶器（Fig.21，PL.14）

無釉陶器

大甕（13）　消し炭壺として近代以降に使用されたものである。底径22.6cm。暗赤褐色の胎土に内外面に厚さ約3mmの黒褐色の化粧土が施され，外面は横方向の叩きの後，縦方向のケズリにより調整，内面にも縦方向のケズリ調整が確認できる。

その他の遺構・層位出土土器・陶磁器（Fig.21，PL.14）

須恵器

8世紀代の須恵器の出土

坏（14）　しっかりした高台を持つ形態で，体部はかなり直立気味に立ち上がる。復元口径13.4cm，復元底径9.7cm，器高5.5cm。近世整地層から出土。

白　磁

碗（15）　低い高台を削り出し，残存する外面が露胎のⅣ-1・a類。内面は施釉され，段が見られる。底径7.2cm。近世の遺構面上から出土した。

青　磁

碗（16）　外面に縦方向の太い櫛目，内面に縦方向の細い櫛目を施し，暗黄緑灰色の釉をかける同安窯系のⅢ-1類。外面体部下半は露胎。Ｓ－10から出土した。

壺（17）　底部の小片。外面上半部に暗緑色の釉をかけるほかは露胎。内底部は釉をカキ取ったような痕跡が見られる。時期・産地等は不明。重機掘削時に出土。

瓦質土器

火鉢（18）　円形のもので，外面は二重の突帯とその間に雷文のスタンプを施文する。突帯から下はミガキによる調整が施される。近世整地層から出土。

古瓦類（Fig.22）

今回の調査ではＳＸ4627を除いては顕著な古代の遺構は検出されなかったが，近世の遺物に混じり，いくつか古代の瓦片も出土している。

平瓦（1～5）　1は老司Ⅰ式に伴う格子の叩打痕をもつ平瓦。近世の遺構面上から出土した。2は縄目の叩打痕を伴う。平安時代後期のＳＸ4627から出土。3・4は斜格子，5は二重斜格子の叩打痕を伴う。3はＳ－13，4は重機掘削時，5はＳＸ4628の攪乱から出土した。

中近世・近代瓦類（Fig.23，PL.14・15）

軒丸瓦（1～3）　いずれも巴文瓦。1は瓦当面が完形で残る。最大径14.2cm，外縁幅28

mm。内区には三巴文の周りに突起気味の12個の大きな珠文が見られる。戒壇院第163次調査で出土しているL1214型式とも思われるが，確定ではない。2は左巻きの巴に珠文が3個残存。3は珠文2個が残る。共に型式番号までは分からない。1はSX4628，2はSX4629，3はS－20（SB4630の柱穴の根石を掻き出したと思われる石・遺物の集積）から出土した。

軒平瓦（4・5）　4は均整唐草文の型式番号0104bである。同じ安養寺地区の第185次調査（九州歴史資料館2003）のほか，観世音寺境内から同笵のものが出土している。特に観世音寺境内での出土遺構SX1200は14世紀前半に位置付けられる。黒色に燻される他の近世・近代瓦とは異なり，灰色を呈し古い印象を受ける。中世安養院に伴う遺物であろう。現代の攪乱から出土。5は五星文が3箇所に施される型式番号1701。戒壇院第163次からも出土している。SX4628から出土した。

観世音寺出土瓦と同笵瓦

丸瓦（6）　平面台形を呈する小さい玉縁を持ち，最大長26.5cm，最大幅14.1cm，最大高6.3cm，最大厚2.0cmで，凹面には鉄線切りの痕跡が残る。重機掘削時に出土した。

平瓦（7）　隅丸方形を呈し，四隅の一つに切り欠きを入れている。最大長27.1cm，最大厚1.8cm。凹面には鉄線引きと離れ砂の痕跡が残る。SX4628出土。

桟瓦（8・9）　8は屈折部が損傷する破片。平面左上に切り欠きを入れる。凹面には鉄線切りの痕跡が残る。最大厚2.1cm。SX4628から出土した。9は調査区の周辺にて採集した資料。対置する二隅に切り欠きを入れる。最大長29.1cm，最大幅32.2cm，最大高6.0cm，最大厚1.8cm。全体に黒灰色を呈し，凸面に上から順に枠で囲んだ「検査之証」，楕円で囲んだ「186」，二重の楕円の内側に「瓦」，外側に「統制証・福岡地方工業協会」，10本の凹線を1単位として菱形の井戸枠状の施文の4つのスタンプが押される。この内，「検査之証」と「統制証・瓦・福岡地方工業協会」の2つのスタンプについては観世音寺境内出土丸瓦の凹面に上下に並べて押された例があり（九州歴史資料館2007），この平瓦とセットになる可能性が高い。戦前のものと考えられる。

青銅製品（Fig.24，PL.15）

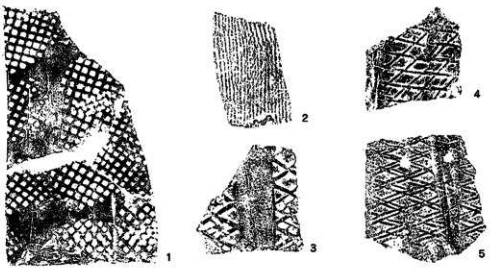


Fig.22　第195次調査出土古瓦（平瓦）拓影（1/4）

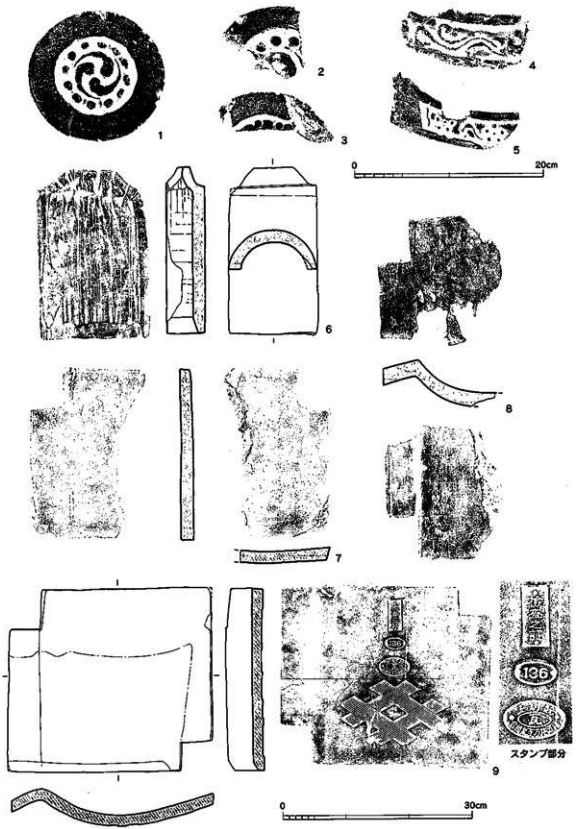


Fig.23　第195次調査出土中近世・近代瓦拓影・実測図（1/4・1/6）

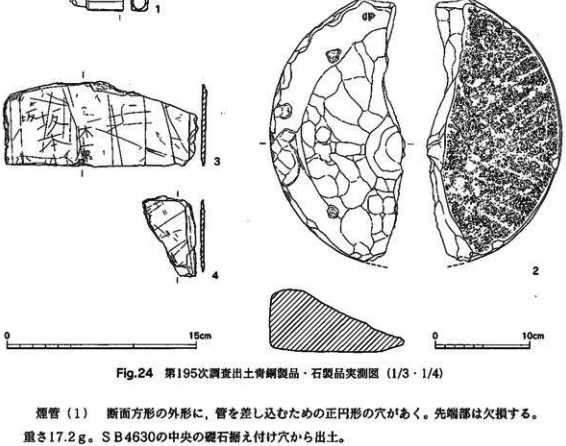


Fig.24　第195次調査出土青銅製品・石製品実測図（1/3・1/4）

煙管（1）　断面方形の外形に，管を差し込むための正円形の穴があく。先端部は欠損する。重さ17.2ｇ。ＳＢ4630の中央の礎石据え付け穴から出土。

石製品（Fig.24，PL.15）

石臼（2）　凝灰岩製の上臼で，下面には６本を１単位として摺るための溝が彫られる。ＳＸ4628の西側トレンチ内から出土した。重さ3.6kg。

石板（3・4）　接合しないが同一個体と思われる。厚さ２㎜の薄い黒色頁岩で作られており，３の表面には「坂本」，「木原」などの線刻字がある。近代以降の習字用の石板として使用されたものか。ＳＸ4628内の現代の攪乱から出土した。重さは順に52.5ｇ，8.8ｇ。

（5）小　結

今回の調査は，中世安養院跡に関する遺構の確認を目的として行った調査であったが，実際には平安時代後期の整地層１箇所のほか，近世後期（19世紀代）の礎石建物１棟，井戸１基，堰甕遺構１基，集石遺構１箇所，整地層１箇所が検出されたのみであった。

この内，平安時代後期（11世紀後半頃）の整地層ＳＸ4627は，他の遺構に比べて飛び抜けて古く，安養院の草創期に関わる遺構である可能性がある。しかし，一部を確認したにすぎず，その全容や性格はわからない。中世に関わる遺構については全く見つからなかったが，観世音寺境内出土のものと同笵の軒平瓦（0104b型式）が１点見つかっており，中世安養院に伴う遺物である可能性が考えられる。また，今回の調査地の家では，宝篋印塔を浮き彫りした板碑や梵字を線刻した板碑が，古くから水神様として祀られている。これらの石造物も元来中世安

養院に由来するものが，時を経て水神として崇拝されるようになったのかもしれない。

近世の遺構はほとんどが19世紀代

また，今回検出した遺構の大半は近世，特に19世紀に限定されるものばかりであった。層位的に見て，礎石建物ＳＢ4630の下層に整地層ＳＸ4628が位置する。そのＳＸ4628からは焼土に混じり大量の瓦片が出土した。また，僅かながら石積みも見られた。礎石建物以前に，別の瓦葺きの建物があったことを示しているのでは無かろうか。

以上の所見と，今回解体した家屋が明治初期まで遡るという証言から考え合わせると，次のようになる。まず，19世紀前半以前，おそらくそれほどは遡らない時期に調査区の場所に石積み（ＳＸ4628）を伴う瓦葺きの建物があったが，19世紀前半頃に焼失したため，石積を埋める形で平坦面を拡張して，礎石建物のＳＢ4630が建てられた。その際の整地としてＳＸ4628が形成され，建物に伴い，井戸ＳＥ4632も作られたと考えられる。その後，明治初年前後に何らかの理由により，ＳＢ4630が廃絶され，平成17年（2005）まで存在した家屋が建てられたと考えられる。おそらく調査区の北側にある石垣についても，この19世紀代のどこかで構築もしくは修復されたものであると考えられるが，それについては次節を参照頂きたい。

いずれにせよ，整地層ＳＸ4627を除いては，安養院跡を時期的に示す遺構を確認することはできなかった。古代の遺物は散在するものの，中世の遺物はほとんど出土しなかったことを考え合わせると，安養院の遺構は今回の調査区までは広がっていなかったと考えられる。しかし，整地層ＳＸ4627については，安養院に進入するための何らかの施設の造作である可能性は考えられる。

今後も安養院跡を始めとする観世音寺子院跡の範囲，内容確認を進め，その解明に努めていきたい。

【参考文献】
九州歴史資料館2003『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅱ』
九州歴史資料館2007『観世音寺―遺物編１―』

2　第195次補足調査（安養寺地区の立会調査）

（1）調査概要

太宰府市観世音寺４丁目785番において，個人住宅建て替えの現状変更許可申請が出されて，九州歴史資料館によって建物部分の発掘調査が行われた。それと同時に敷地北側の法面の補強工事が行われることになり，観世音寺の子院の一つである安養院(註1)の坊跡に伴う法面の可能性があることから太宰府市教育委員会が立会調査を実施することになった。

敷地北側の法面の石垣調査

工事前の北側法面の状況は，敷地東側に隣接する南北方向の道路から西に約16mまで，明治年間以降に本格的な流行をみるいわゆる谷落とし積み(註2)による石垣が築かれていた(Fig.25，PL.８-１，以下「石垣１」と呼ぶ)。これは道路に面する部分や近隣の敷地内においても同様の石垣が存在している。また，敷地北側法面の残りの部分においては一部に石列が存在する程度であり，土肌が露呈した斜面が存在していた。この石列が中世に遡る石垣(Fig.25，PL.８-４，以下「石垣２」と呼ぶ)である可能性があったために確認調査を行った。

工事立会の際は敷地内の北側法面の石垣１は取り除かれた状態であった。調査は平成17年12月16・20日の二日間で行った。その具体的な内容は，石垣１除去後の土層観察，石垣２法面清掃後の様相把握と土層観察である。

なお，石垣２は調査後に新たに築かれた擁壁内に保存されている。

（2）基本層序

Fig.26は敷地北側法面部分の石垣１除去後の土層図である（PL.８-２)。11橙白色土(花崗岩風化土)の地山，10暗褐色土(炭化物含む)が凹凸を成して堆積していたと思われる。そして凹部を７～９のマサ土で埋めて平坦面を造成したと考えられる。その後，６旧表土が堆積した後に，道路側に石垣を築くために約７mにわたって道路に向かって削り込みを行い石垣１が築かれた。調査対象敷地における石垣１は，明治初期に建築された住居(建築様式と住民からの聞き取り調査による)に近接して存在していた(PL.８-１)。これら石垣１は明治年間以降に流行をみるいわゆる谷落とし積み(註3)による石垣であり，その構築時期は住居が建築される直前とみて差し支えないと考える。また，２～５においては石垣１の裏込め土とは異なる堆積土を確認した。これらは石垣１の西隣にある後述の石垣２の裏込め土でもない。これらは２と４にみられるように，石垣１構築以前に堆積していたマサ土と近似することなどからも石垣１よりも古いが，この辺りがマサ土によって造成されて間もなくして築かれた石垣の裏込め土の可能性が高いと考えられる。

Fig.27は敷地北側法面部分の石垣１の西端に相当し，石垣１が取り除かれた時に図化したものである（PL.８-３)。１～６はその堆積状況から勘案して，調査対象敷地の北側上段敷地から流入した土層堆積と考えられる。法面下層部分において石が礫まって存在するが，これらは石の配置に規則性を見出すことができない。また，２・３から近代と考えられる桟瓦，４からはプラスチック製洗濯バサミが含まれていたことから，これらの土層堆積は戦後以降に形成されたと考えられる。

Fig.28は今回の確認調査の発端となった石垣２の立面図と断面図である。高さ70cm程度で

石が組まれて石垣の形状を成す。しかし，正面から観察したのみの判断ではあるが，石垣の裏込め用の栗石は全く確認できない。断面図からわかるようにこの石垣は上に行くほど若干張り出し気味になる。これらのことから，むしろ石垣ではなく調査対象敷地の北側の造成土が敷地内に流入することを防ぐための土留め的な石積みという表現の方が無難であろう。石垣２は調査対象敷地内における建物がなかった部分に存在する。おそらく明治初年に建物を建築する直前までは敷地の北側法面は石垣２によって構成されていたと考えられ，建物建築に伴って建物近接部分にのみ石垣１を構築して法面を強化したものと考える。そして，戦後以降に石垣１がない部分に石垣２を覆う形で土砂が上段敷地から流入したものと考える。以上のことから，石垣２の構築時期は明治初期以前と考えられる。

（3）小　結

石垣１は明治時代初期

石垣２は明治初期以前

今回の確認調査は，旧石垣[1]（石垣１）の解体と表土（石垣２）の清掃による観察できる部分からの所見にとどまった。石垣１については，明治初期に築かれた可能性が高いことが石垣１に近接していた建物建築時期と石垣１の積み方から明らかとなった。また，今回の調査の発端となった石垣２については中世段階の所産である可能性を想定しながらの調査ではあったが，今回の調査においては明治初期以前の所産である可能性を示唆するにとどまった。本来は石垣２の裏込め部分に調査トレンチを設置して土層観察と遺物採集などを行うことが石垣２に対する妥当な調査と考えるが，石垣２が現段階においては破壊されないということから，いわゆる地表面観察までにとどめた調査所見である。なお，石垣２が中世段階の所産である可能性に至った経緯は，本調査地の北東側に展開する原遺跡や太宰府市北東に位置する宝満山遺跡群においても同様の石垣（石積み）遺構が検出されているなどの理由である[註4]。しかし，石を積むという行為は，先行する石垣を真似て後世においても築かれることが多々あるため，今回のような地表面観察による調査のみでは石垣構築時期については断定し得ないのが現状といえよう。今後の調査に期待したい。

【註】

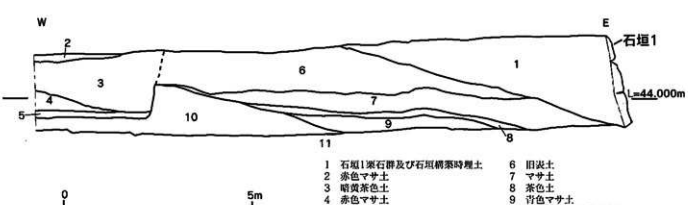
1）高倉洋彰1977「筑紫観世音寺子院小考」『九州歴史資料館研究論集』３　九州歴史資料館

2）北垣聰一郎1987『石垣普請』法政大学出版局

3）註２と同じ。

4）例えば，宝満山遺跡群は第21・25次調査において(太宰府市教育委員会2001『宝満山遺跡群』Ⅲ，同2005『宝満山遺跡群』４)，原遺跡においては2006年度に福岡県教育委員会の調査によって検出した。また，宝満山遺跡群内に所在する有智山城跡(中世城郭遺跡)においては土塁に同様の様相を呈した石垣を地表面観察によって確認できる。

Fig.25　第195次補足調査地位置及び調査石垣配置図（1/1,000）



1　石垣1裏石群及び石垣構築時埋土
2　赤色マサ土
3　暗黄茶色土
4　赤色マサ土
5　黒色土
6　旧表土
7　マサ土
8　茶色土
9　汚色マサ土
10　暗褐色土(炭化物含む)
11　橙白色土(花崗岩風化土)[地山]

Fig.26　石垣1除去後　①部分土層図（1/100）

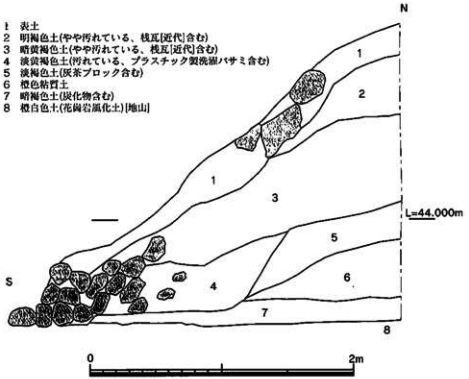


Fig.27　石垣１除去後　②部分土層図

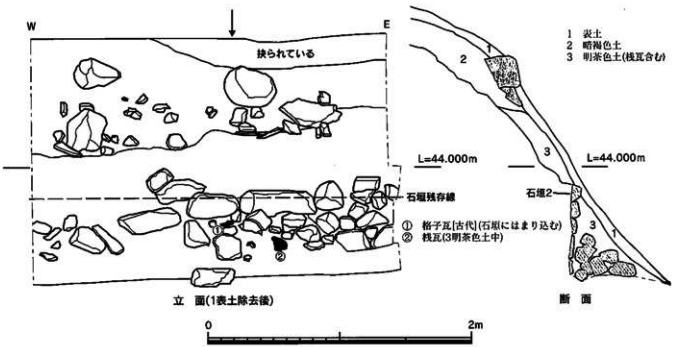


Fig.28　石垣２法面清掃後　③部分立面・断面図

Ⅳ　大宰府史跡採集品寄贈資料

（1）経緯

第195次調査を行った際に，調査地の地権者の方より，先年亡くなられた地権者の配偶者の方が長年，周辺から採集してきた遺物について当館に寄贈を受けた。恐らく大半は安養寺地区周辺において表採されたものであると考えられるが，明確な表採場所が特定できないため，いちおう大宰府史跡採集品として，特に特殊遺物についてここで報告する。

（2）資料の概要（Fig.29，PL.16）

陶磁器

白磁碗（1）　高い高台を持つⅤ類。残存する外面は全て露胎。底径6.2cm。

白磁壺（2・3）　共に四耳壺の底部と思われ，青みがかった白色釉がかかり，底部露胎。2の底径7.3cm，3の底径は7.0cm。

青磁碗（4・5）　共に龍泉窯系のもので，4は見込みに劃花文を施すⅠ-2・b類。底径5.5cm。5は見込みに草花文のスタンプを押す。高めの高台で14～15世紀代か。底径6.0cm。

瓦質土器

火鉢（6・7）　共に円形のもので，6の外面には菊花文のスタンプと方形・円形の透かし孔，7の外面には2本の突帯とその間に梅花文をスタンプ施文する。

石製品

滑石製石鍋（8・9）　8は口縁部片。9は底部片。共に外面に縦方向のケズリが見られる。8は，鍔の形態等からC－1型式で，13世紀後半に位置づけられる（杉原2007）。

砥石（10）　白っぽい褐色を呈する石英斑岩製。重さ120.9g。擦痕が激しく入る。

鋳造関連遺物

溶解炉壁（11）　表面に暗褐～黒褐色の溶解物が付着する大型の溶解炉の破片。緑青の付着が見られないため，鋳鉄用なのか鋳銅用なのかは不明。重さ900.0g。

瓦類

軒丸瓦（12）　275A型式の老司Ⅰ式の破片。僅かに珠文と逝弁・鋸歯文が残る。

軒平瓦（13）　562型式の破片。下外区に楕円形の珠文8個と内区に偏行唐草文が見られる。

文字瓦（14・15）　14は陰刻の斜格子に，陽刻の「平井」の文字を付した叩打痕が残る901B型式の丸瓦。15は陽刻の斜格子の中に陽刻で「十」の文字や，「大」に「立」の字を組み合わせた文字を陽刻した叩打痕が残る916B型式の平瓦。

鬼瓦（16）　左下部の破片と考えられる。上面に直径2.8cmの竹管文が縦に5つ並び，更に右側に1個付される。最大厚2.8cm。やや小型の部類に属する。平安時代ころのものか。　**平安時代頃の鬼瓦**

【参考文献】
杉原敏之2007「観世音寺出土の滑石製石鍋」『観世音寺―考察編―』九州歴史資料館

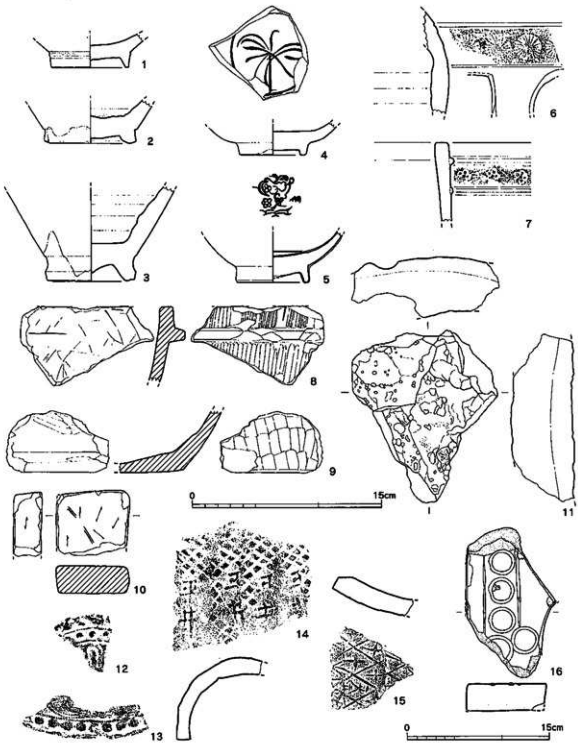
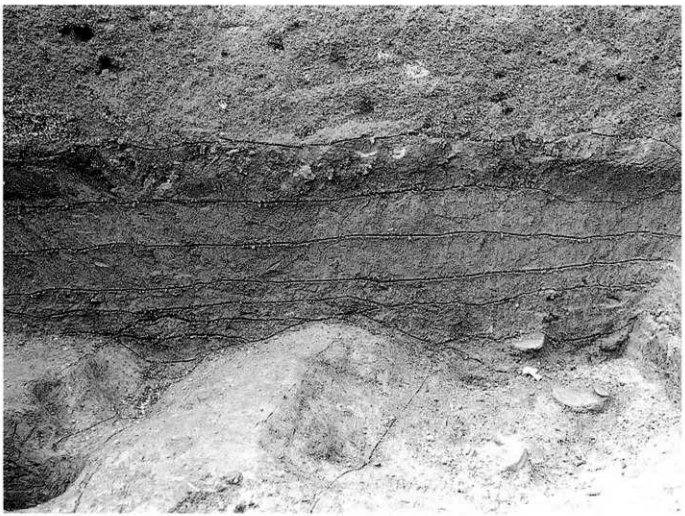


Fig.29 寄贈採集遺物実測図（1/3・1/4）

P L A T E S

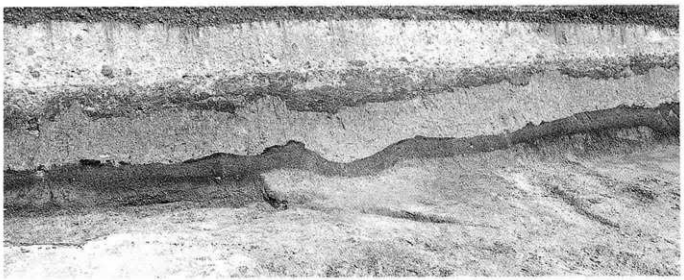
(1) 第192次調査区全景（南から）



(2) SD4610・4611土層断面（東から）

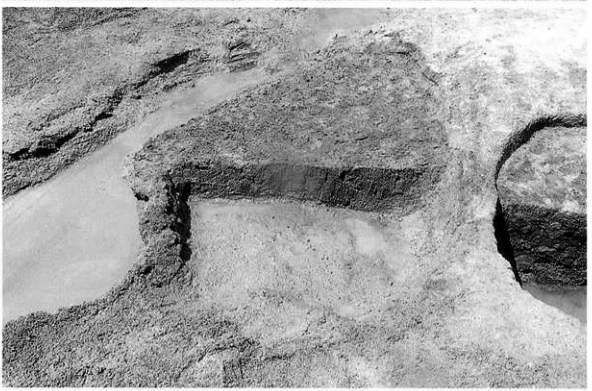
(1) 第193次調査区（東から）

(2) 第193次調査区（西から）

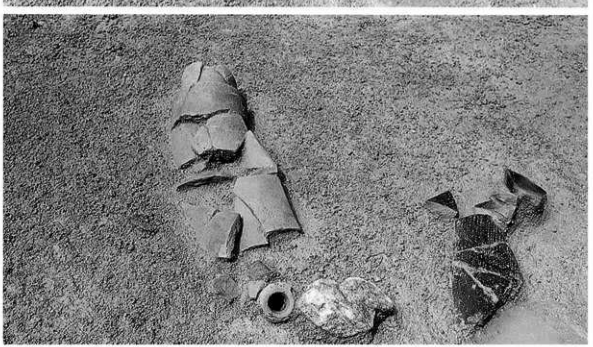


(3) 第193次調査区東壁土層（西から）

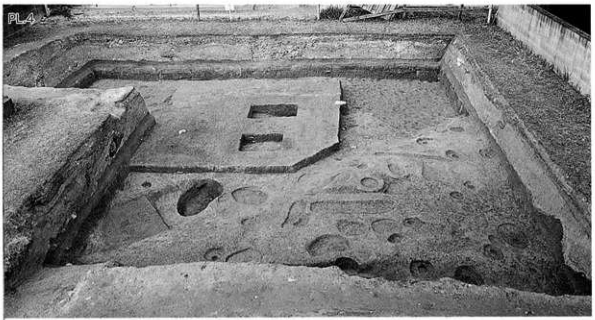
(1) SK4615（南から）



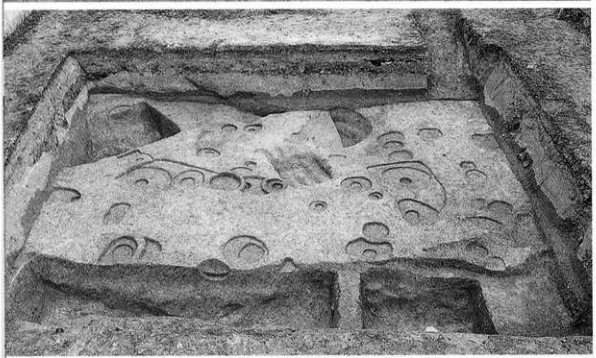
(2) SK4616（南から）



(3) SX4617遺物
出土状況



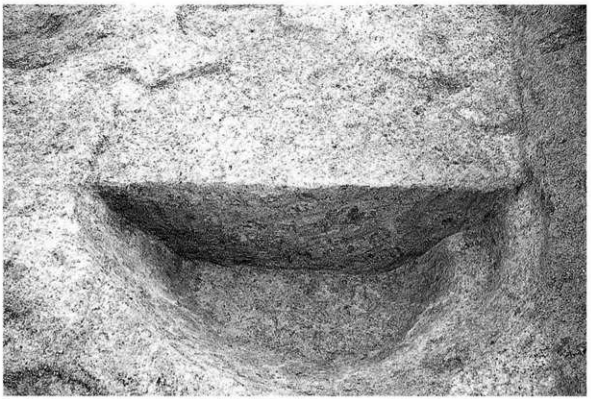
(1) 第194次調査区
北半部（南から）



(2) 第194次調査区
南半部（北から）

(3) 第194次調査区
南半部（西から）

(1) SK4622
（北東から）



(2) SK4623
（西から）

(3) SX4619遺物
出土状況（西から）

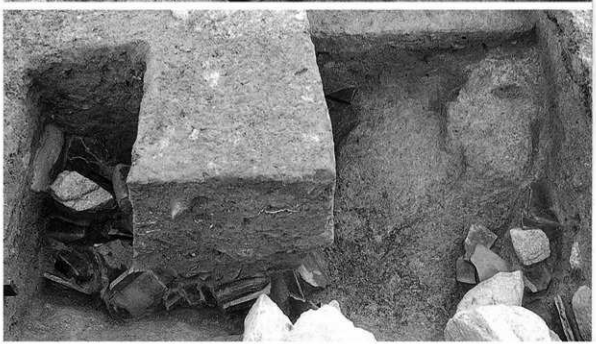
(1) 第195次調査区
全景（東から）

(2) 第195次調査区
全景（西から）

(3) SB4630礎石
据え付け穴（北東から）

(1) SX4627土層
断面（北から）

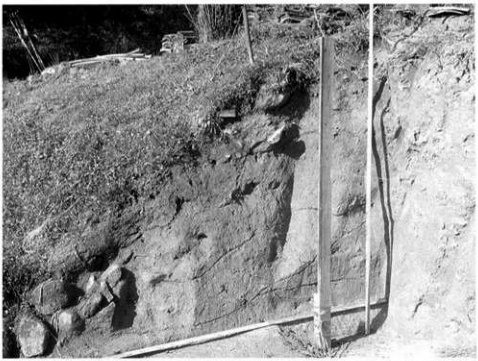
(2) SX4628石垣
遺構検出状況
（南西から）



(3) SX4628遺物
出土状況
（北から）

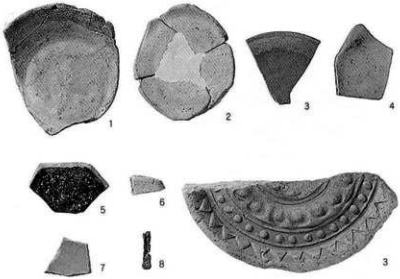
(1) 石垣１南面孕み状況
（南西から）

(2) 石垣１南面除去後
土層観察（南から）

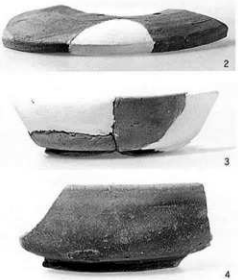


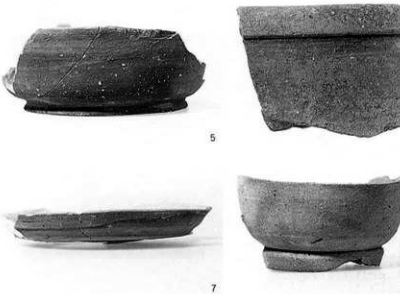
(3) 石垣１南面除去後
②部分土層観察（東から）

(4) 石垣２法面清掃後
③部分正面（南から）

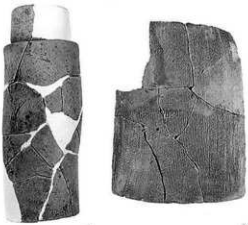


(1) 第192次調査
出土遺物

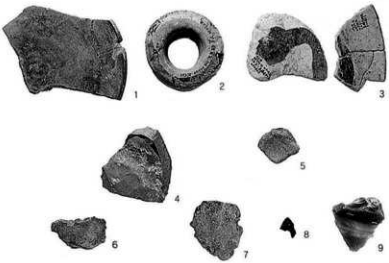




土器・陶磁器

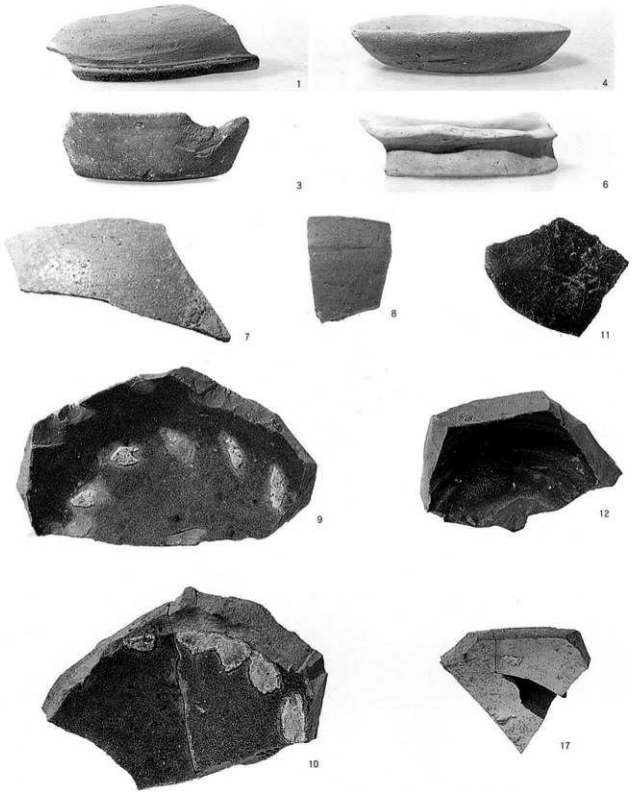


瓦類



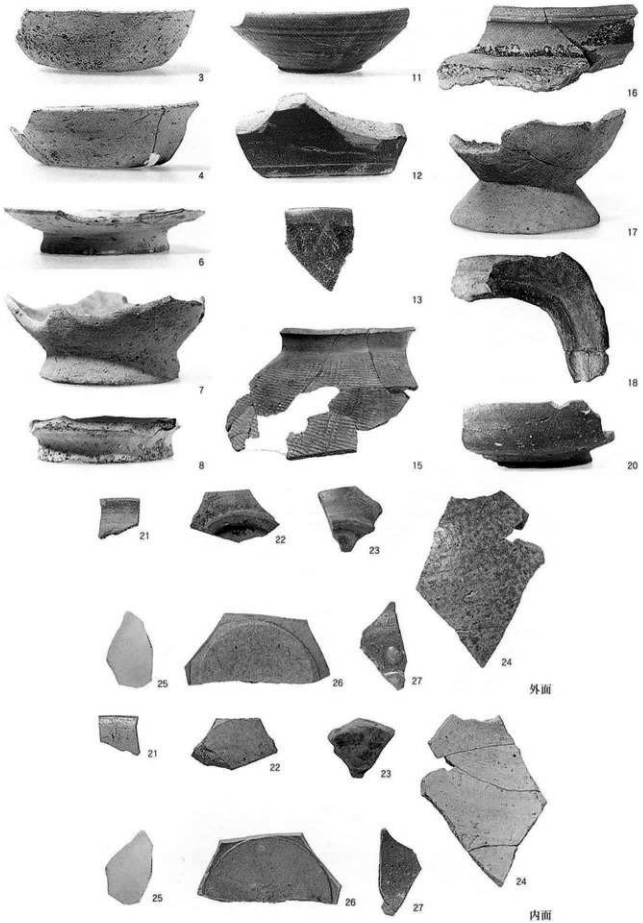
転用硯・漆付着土器・石器など

(2) 第193次調査出土遺物



SD2705A・SK4622出土土器・陶磁器

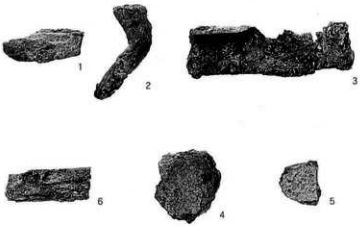
第194次調査出土遺物（1）



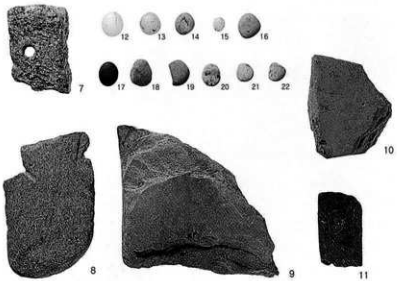
SX4619・その他の遺構・層位出土土器・陶磁器

第194次調査出土遺物（2）

瓦　類

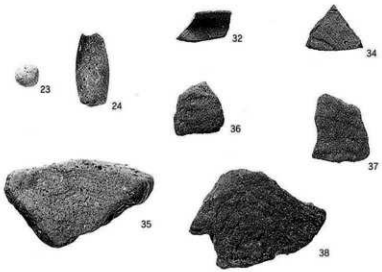


鉄製品

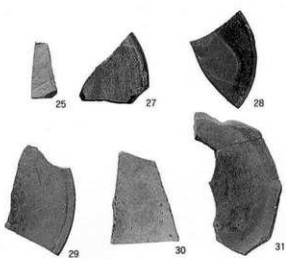


石製品

第194次調査出土遺物（3）



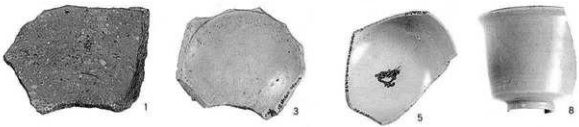
土製品
漆付着土器
製塩土器

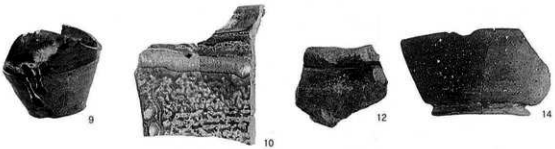


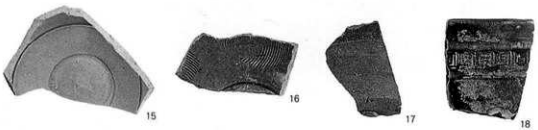
墨書土器
転用硯

鋳造・鍛冶
関連遺物

第194次調査出土遺物（4）







13

4

土器・陶磁器

1

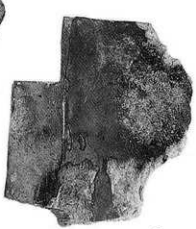
5

瓦類（1）

第195次調査出土遺物（1）

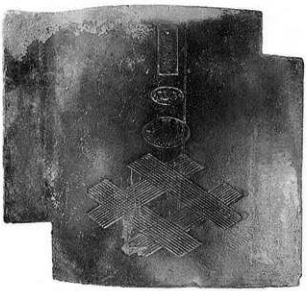
6

7



8

1



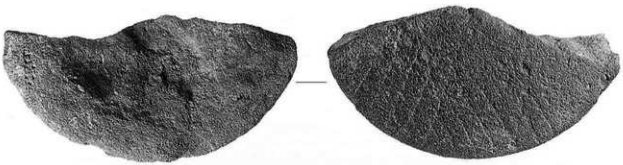
9

3

4

瓦類（2）

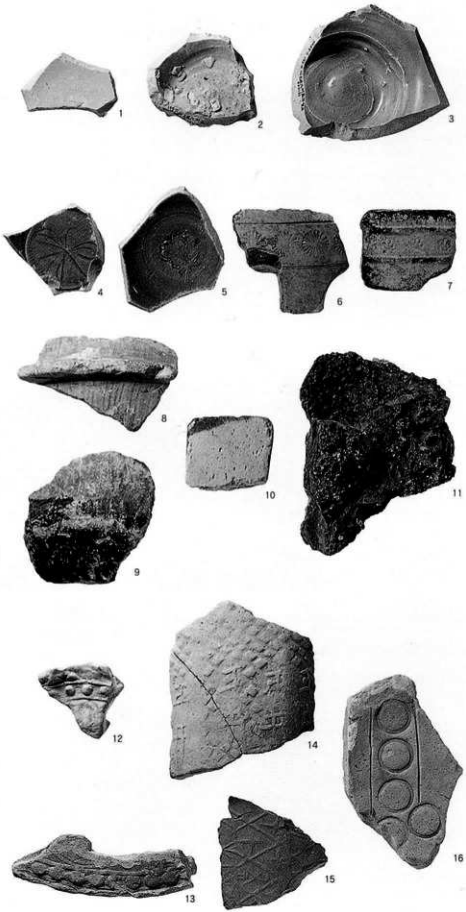
青銅製品・石板



2

石臼

第195次調査出土遺物（2）



大宰府史跡採集資料

報告書抄録

ふりがな	だざいふしせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大宰府史跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	Ⅳ　平成16・17年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	児玉真一・下高大輔・岡寺　良（編集）
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒818-0118　福岡県太宰府市石坂4-7-1　℡092-923-0404
発行年月日	2007年10月15日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
大宰府史跡第192次調査	太宰府市観世音寺2丁目103番	40221		33 30 31	130 30 55	041215～041217	6㎡	住宅建設
大宰府史跡第193次調査	太宰府市観世音寺2丁目207番	40221		33 30 32	130 30 43	050725～050809	67㎡	住宅建設
大宰府史跡第194次調査	太宰府市観世音寺2丁目166番	40221		33 30 33	130 30 49	051109～051217	105㎡	住宅建設
大宰府史跡第195次調査	太宰府市観世音寺4丁目785番	40221	210044	33 30 46	130 31 16	060117～060131	135㎡	住宅建設
大宰府史跡第195次補足調査	太宰府市観世音寺4丁目785番	40221	210044	33 30 46	130 31 16	051216～051220	50㎡	石垣改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府史跡第192次調査	官衙	奈良・平安時代	溝　3条 整地層	須恵器・土師器 緑釉陶器 瓦類・鉄製品	
大宰府史跡第193次調査	官衙	奈良・平安時代	土坑　2基 整地層	須恵器・土師器・陶磁器 瓦類・製塩土器 鴟羽口・漆付着土器 転用硯	
大宰府史跡第194次調査	官衙	平安・鎌倉時代	掘立柱建物　2棟 溝　3条 土坑　2基 整地層	須恵器・土師器 瓦類 鋳造・鍛冶関連遺物 漆付着土器・製塩土器 石製品・土製品 緑青土器・転用硯	・条坊ラインを意識した区画溝の検出 ・大宰府政庁域における286型式軒丸瓦の初の出土
大宰府史跡第195次調査	寺院	平安時代	整地層	土師器 陶磁器（白磁・青磁） 瓦類	
		江戸時代	礎石建物　1棟 井戸　1基 巣石遺構　1箇所 石垣遺構　1箇所	国産陶器・磁器 青銅製品 瓦類 石臼	・大半が19世紀以降の遺物・遺構
大宰府史跡第195次補足調査	寺院	江戸時代～近・現代	石垣遺構　1箇所		

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 19	登録番号 0002

大宰府史跡発掘調査報告書　Ⅳ

平成16・17年度

平成19年10月15日

発　行　九　州　歴　史　資　料　館
太宰府市石坂4丁目7番1号

印　刷　株式会社　三　光
福岡市博多区山王1丁目14-4